2014 年度未来先導基金公募プログラム

2014 年度
「庄内セミナー」報告書

Contents

「生命の源と死を想い、〈生きること〉を考える」を終えて　2

「庄内セミナー」の概要 …… 3

参加者レポート…… 7

資料編…… 41

「生命の源と死を想い、〈生きること〉を考える」を終えて

教養研究センター所長
小菅隼人（理工学部教授）

「庄内セミナー」は、2008年「鶴岡セミナー」という名前でスタートしました。慶應義塾大学先端生命科学研究所および慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパスが山形県庄内地方の鶴岡市に置かれているご縁を活かし、教養の土台となる、「自ら体験し、議論し、思想としてまとめ上げる力」を涵養するための「学びの場」を、鶴岡市を中心とした庄内地方に創り上げようとする教育上の実験を意図してのことです。いま、この試みは、我々の予想をはるかに超える成功を収めたと確信を持って言うことができます。それは、1回目から6回目となる2014年度まで、このセミナーに参加したことによって、「生命とは何か」という、人間が常に向き合わなければならない根源的な問題に、参加者全員が真剣に向き合い、格闘し、そして、毎回、全ての参加者が、自分の心の中に生命についての何らかの問題意識をより明確にもつことができたことを、参加者自らが報告し、また主催者としても、彼らの態度や発言に表れた変化を実感しているからです。

これまでの参加者は約200名にのぼりますが、最初の参加者は既に社会で大きく羽ばたこうとしています。彼らは、慶應義塾の目的である「我日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し、之を実際にしては居家、処世、立国の本旨を明にして、之を口に言ふのみにあらず、躬行実践、以て全社会の先導者たらん」(「慶應義塾の目的」)としておりますが、その彼らの心の中に庄内セミナーで触れた自然と文化への思いがあることは間違いありません。また、セミナーを通じての温かい交流が彼らの人間性をより豊かにしていることも確かです。そしてなにより、このセミナーで学んだ「生きること」とはどういうことかという課題がこれからの彼らの生き方に大きな示唆を与えてくれているはずです。庄内地方および鶴岡市での一夏の経験を彼らが忘れることは決してないでしょう。

この豊かなセミナーを可能にしてくれたのは、鳥海山・出羽三山、庄内平野、日本海という豊かな自然と、鶴岡市を中心とする庄内地方における驚くべき豊かな文化と、そして慶應義塾を温かく迎え入れ、物心両面にわたって多大なご援助をいただいた鶴岡市および庄内地域の方々です。このセミナーを応援してくださった方々のお名前を全てあげるとすれば紙数がいくらあっても足りません。それらすべての方々のお顔を思い浮かべつつ、鶴岡市長の榎本政規様と元庄内藩主酒井家18代当主の酒井忠久様のお名前のみをあげ、慶應義塾大学教養研究センターを代表して心より御礼を申し上げます。

このセミナーは2012年度より慶應義塾未来先導基金を受け、今年度が最終年度にあたります。私達は、いま、このセミナーの成果を振り返り、その意義を深く実感し、さらに豊かな「実験授業」として発展・継続すべく計画中です。今後とも皆様のご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

2014 年度「庄内セミナー」報告書

「庄内セミナー」の概要

第５回庄内セミナーについて

1. 趣旨・目的

教養研究センターが主催する今年度の庄内セミナーは2014年度慶應義塾未来先導基金公募プログラムとして実施されました。「庄内セミナー」としては５回目の実施です（2008年度には下記と同様の趣旨・目的で「鶴岡セミナー」を開催しています）。

山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を拠点とするこのセミナーの目的は「教養力」すなわち「自立・自律力」と「社交力」の涵養を通した「教養」の基礎体力作りにあります。今回は、過去の実績を踏まえ、かつ内容・形式の見直しを行った上で、以下のような趣旨・目的を掲げました。

① 鶴岡市、TTCK を拠点として新たな体験・体感型の「学びの場」を創出する。
② 鳥海山･出羽三山、庄内平野、日本海に囲まれ、歴史･文化･自然･人の織りなす多彩な「生命」に恵まれた庄内をフィールドとして多角的に「生命」について体験・体感する。
③ 学生・大学院生・社会人の参加を募り、それぞれの参加者が忙しない日常から離れて、じっくりと「生命」について考え、地元との交流なども図りつつ、対話と議論を通してコミュニケーション力を高め合う。

2. テーマ

庄内セミナーでは、総合テーマと基調テーマ、そして年度ごとのテーマを設定します。総合テーマはセミナー全体を包み込む大枠です。庄内において、とりわけ「生命」に焦点をあてたセミナーであることを物語るものとして設定しています。これに対して基調テーマは、「心と体と頭と」を存分に使い尽くして「学び」の場を広げることを意識して、「行動する教養」あるいは「教養する」ことを強調しています。セミナーの土台を示すテーマです。そして、年度ごとに庄内からさまざまなテーマを選び出したものが年度テーマです。これが参加者たちにとってはグループワーク、プレゼンテーションの実質的な課題となります。すなわち―

★総合テーマ：『庄内に学ぶ「生命（いのち）」―心と体と頭と―』

日本海・庄内平野・鳥海山・出羽三山が織り成す庄内という小宇宙とその歴史の中で育まれてきた「生命」の在り様を学びつつ、慶應義塾において進められている「生命」に関わる多様な研究・教育の成果をも取り入れることで、「生命」を総合的に考えることを趣旨としたテーマです。

★基調テーマ：
「知る・見る・表現する―行動の教養学入門」
★2014年度テーマ：
『生きることを考える――庄内に学ぶ生命』

3. セミナーの概要

第５回庄内セミナーは「生きることを考える－庄内に学ぶ生命」をテーマに、山形県鶴岡市の慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を中心に８月28日～８月31日までの３泊４日で開催しました。このセミナーには学生29人と社会人１人の計30人が参加しました。

初日はTTCKに現地集合し､6班に分かれて「生命」をキーワードに、思考・発想法の一つの「マインドマップ」を作成しました。その日の夜は井奥洪二氏(経済学部教授)による「即身仏－身体を考える」をテーマとした講義では参加者と活発な質疑が行われました。

２日目は注連寺の即身仏を拝観し、その後鶴岡市内に戻り、致道館で「庄内論語」を体験しました。また、夜は地元から酒井忠久氏（致道博物館館長）と東山昭子氏（鶴岡総合研究

対話と議論

庄内論語の素読体験

2014 年度庄内セミナー・プログラム

〈事前準備〉		
8 月 6 日	参加者に対する事前説明会	来往舎
8 月 24 日	事前課題「生命の源と死を想い、「生きること」を考える」について 400 ～ 600 字のレポート提出	
〈合宿セミナー〉		
8 月 28 日	［セッション 1］アイスブレイク・マインドマップ（1）作成・グループ討議	TTCK
	［セッション 2］「即身仏－身体を考える」 講師：井奥洪二氏（慶應義塾大学経済学部教授）	休暇村 羽黒
8 月 29 日	［セッション 3］即身仏拝観	注連寺
	［セッション 4］松ヶ岡開墾場見学	松ヶ岡開墾場
	［セッション 5］鶴岡を知る ・「庄内論語素読体験」 指導：富樫恒文氏（庄内藩校致道館統括文化財保護指導員） ・自由行動	致道館・鶴岡市内
	［セッション 6］「庄内文化論」 講師：酒井忠久氏（致道博物館館長） 東山昭子氏（鶴岡総合研究所　研究顧問）	休暇村 羽黒
8 月 30 日	［セッション 7］山伏修験体験	いでは文化記念会館など
	［セッション 8］「羽黒修験」 講師：鈴木正崇氏（慶應義塾大学文学部教授）	休暇村 羽黒
8 月 31 日	［セッション 9］慶應義塾大学先端生命科学研究所ラボ見学	先端研ラボ
	［セッション 10］まとめ：マインドマップ（2）作成とグループ討議	
〈まとめ〉		
9 月 30 日	事後課題（「生命」について 2000 字程度のレポート提出）	

注連寺にて即身仏拝観

松ヶ岡開墾場見学

山伏修験体験

講師を務めた井奥洪二氏（上）、酒井忠久氏（中左）、東山昭子氏（中右）、鈴木正崇氏（下）

全員集合（最終日）

所　研究顧問）による「庄内文化論」をテーマとした講義が行われました。

3日目は羽黒山で山伏修験体験が行われました。白装束に着替え、その後滝行、羽黒山踏破、床固め、南蛮いぶし、火渡りで「擬死再生」の一端に触れる体験をしました。その夜は、鈴木正崇氏（文学部教授）による「羽黒修験」をテーマとした講演が行われました。

最終日はTTCKにほど近い慶應義塾大学先端生命科学研究所で展開されている、最先端のバイオテクノロジーを用いた研究成果や施設を見学しました。その後、各自で初日に作成したマインドマップを見直し、変化したことを確認しました。また昼食を兼ねた懇親会では、榎本鶴岡市長を囲んでセミナーに参加した感想などを披露して解散となりました。

2014 年度「庄内セミナー」報告書

参加者レポート

2014 年度の「庄内セミナー」参加者に、次のような事後課題が与えられました。本稿は、提出されたレポートを参加者の 50 音順に掲載したものです。

〈事後課題〉

1. テーマ：「生命」を考える
   庄内セミナーを通じて体感･体験したこと、考えたこと、話し合ったことなどを基礎として、各自の「生命観」（「死生観」「身体観」などでもかまいません）について述べてください。
2. 字数：2,000 字程度（これを超えてもかまいません）
3. 締切：2014 年 9 月 30 日（火）

＊本セミナーでは、「自分について考える」を事前課題のテーマとして課しました（600 字程度）。以下のレポートには、この事前課題を前提もしくは発展させた内容のものも含まれています。ただし、紙面の都合上、事前課題そのものの掲載は見合わせました。

考えること、感じること

法学部（法律）４年　池邉 由望

生命について死について「考える」こと

私は死が恐い。おそらく多くの人が死を恐れているだろうと思う。何故人は死を恐れるのか。私は実際人間が恐れているのは死ぬことそのものとではなく、死について考えることではないかと思う。けれど日常を生きる私たちは、ふとした折に死について考えてしまうし、その「死について考える」能力を持っていることからは逃げられない。時間の概念を持ち、将来のことを考えて生きるからこそ考えてしまうのだろうと思う。

人が死を恐れるが故に生に対して悲観的になることと、死を恐れるが故に行動的になることは根本的には同じことなのではないかと思う。前者は死を恐れ生きている意味がわからなくなり、「いつか必ず死ぬのだから」自分なんていらないのではないかと生を悲観し、人によっては自死によって死を恐れることから逃げられるという考えに行き着く。後者は死について考えないよう、目の前の行動によって目隠ししてしまう。「いつか死ぬのだから」それまでは好きなことに打ち込もう、と。後者と同じようなことをパンセの中でパスカルも言っていたように記憶している。

修験体験に臨む際、「足るを知る」といったような境地に置かれるのではないかと想像していた。生の極限に触れるとのことで、水が飲めるだけで、空気が吸えるだけで、座れるだけで、ありがたい。そう思えるようになるのではないかと考えた。日常を離れ考えること、それは日常以外のもっと大きなことばかりかと思っていた。しかし実際に頭にあったことは日常のことがほとんどであり、しかもより強く日常を想った。自分の生命について考えた。将来を想った。ただいつもと違っていたのは死について考えることを恐れなかったことだ。これは、その場で生命を奪うと何者かに宣言された時、抗わないということではない。生命を悲観するでもなく、行動により死から目を逸らすでもなく、ただ生命について死について考えつづけた。生命を考える上で大切なことは生を実感することなのかもしれない。

日常生活においても、恐れながらもいいから、生命について死について「考える」こと、そのこと自体に意味があるのではないだろうか。そんなことを考えるようになった。

大きなものの存在を感じること

生命について死について考える一方で、修験の中で自分の生命の儚さと力強さを考えるというよりも感じる場面があった。またセミナー全体を通して、大きなものの存在と自分について考えるようになった。なかでも生命から始まるマインドマップの中に自分を見つけられたことは大きな発見であった。

自然の輪の中の自分、生命輪廻の中の自分、宇宙の中の自分。そういった自分をとりまく大きなものの存在を、いつもでなくていいから、日々の生活の中で感じていきたいと思う。

「生命」を考える

経済学部２年　石川　悠

今回の教養研究セミナーは恐らく東北に入った時点で始まっていたのでしょう。庄内セミナーの前に南三陸プロジェクトがあり、その流れで鶴岡市に入りました。東北地方を車窓から見ているとよく思うのはだだっ広さ。まず自分がここで生活していたらどうなんだろうと考えました。見知らぬ土地に憧れを抱くのは東京やその近郊においても同じですが、さてそこで生きていくことになったとき、どうしていくのか悩みました。

東北に関しては、まず、産業と言うものがあまり見当たりません、農業、そしてそれに従事していく人のための生活関係の商業、ときどき見かける工場、きっとそのくらいでしょう。いくら自然が美味しいなどのフレーズを思い出そうとしても、真っ先に出てくるのは、どこも同じ田舎じゃないかと。ここに自分の住まいを見出すのは絶対無理だなと感じました。で

は、逆に住まいを見いだせる所と言う所はどこかと言われたときに、自分はその土地と何かしらのつながりを感じられる、またはその土地らしさを享受できるところでなら見いだせると思います。それは、日々常日頃から思うことで、自分の生命観につながっていることだと思います。

しかし、生命観と漠然と言われても、生命観ってなんでしょうか？　まず、wikipedia で調べてみると…

生命とは何か、ということについての論や見解を生命論や生命観と言う

と出てきます。

まず、生命そのものとは何か？　隕石が衝突し地球が形成するくらいの昔に、付着したタンパク質がどうのこうので生命が生まれたとされていますが、そのような観点でみるとたまたまタンパク質があって長い年月を経て、人間、動物、植物の数々に種類が別れたのであって元々は生命以外にも並列した概念があるような気がしてなりません。生命がただ単純な起源をもつ分、他の種類も生命、○○、○○、○○…のようにあるのではないかと考えました。また、最初のマインドマップでは在る無しに偏って捉えていたりして、宗教や言葉遊びで自己完結していた節がありますが、やはり他人のマインドマップを見ていると連想した言葉も違いますし、またその形状も大きく異なることに、自分の考えがいわゆる相対的なものであると感じさせられ、さらに突き詰めていこうという思いへと変わりました。

しかし、結局は私個人が自分のために出す問題であり、あくまでそれらは刺激程度で、自分なりに結論を出すと、マクロ的な側面では生命とは、とるにたりない、他にもあるであろう概念と並列する要素の一つであると考えました。そして、ミクロ的な見方をすると代謝を重ね変化していくものだと思います。

さて、マクロ的な側面での生命とは他にもあるであろう概念と並列する要素の一つと言いました。これは恐らく生命じゃないもの、たとえば石は生命ではない概念のひとつなのです（とりあえず無生物とします）、またそのほかにも、ここで挙げることはできませんが、同等の物があり、生物と無生物の二つの対立ではなくもっと多様ものなのだと考えました。たしかに、修験道では山を駆け下りる姿が、山は母であり修験者は生まれてくる子供であるといった人間の生命観のように描かれ、生命とは絶対的なものであるかのように思えてしまったのも確かなのですが、しかし、自分の心の芯ではそう見ているだけなのねと冷ややかな目で見てしまったのに気が付いてしまったのです。いかに他者がどう認識しようが、生命観はとりあえず自分が持つものであり、これは自分の生命観ではないなと思い、ワープロを打っていると、自然とキーボードを打てるテーマは、生命とは本当はとるにたらない存在じゃないかという思いの方で、その結論を未来に先延ばしするかのようですが、まだまだ知られていない概念が生命に並列してあるのではないかという願いがありました。

今度はミクロ的な要素の生命観。とりあえず生命が唯一存在する人から地球全体までを指せるとても大きな範囲を持つものだとして考えてみると、やはり新陳代謝がとても重要な役割を果たすと思います。最初の頃は在りと無しの対立で考えて行こうと思いましたが、修験道などでの死との境界の体験などで、きっぱりと境界が別れたものは存在しないのだと身をもって痛感した次第です。何のために新陳代謝をするのかはおいておいて、人などの生物は変わっていきます。同じように見えても食べ物を食べ排泄することで中身は変わっていたりしますし、知識にしても吸収した物を既存の知識と混ぜ合わせて既存の物と少し違うものができていきます。そこに成長や、よりよくなる自分を感じ満足するときもありますが、でも最終的に何を目的にしてゴールと言うものはあるかと言われたら言葉に詰まります。つまり生きていることは何の目的があるのでしょうか？　宇宙の歴史から見たら一瞬でもある人生や人間の歴史には何の意義があるのでしょうか？これに関しては少なくとも生きている間にはわからないでしょうと思います。恐らく自分がこれからの人生で何を成し遂げたとしても、人間の人生の意義は分からないですし、その点において人間を超えることはできないでしょう。人間の人生の意義は、少なくとも生きている人にはわからないものなのではないでしょう。大きな謎ではありますが、とりあえずいつか分かる人間が出るまでは、生きて子孫を繁栄させて繋いでいくしかないと考え、分かるときまで繋ぐのがとりあえず今の時代に生きる自分の人生の意義であり、そうした営みが自分の生命観なのだと思いました。

『生命』を考える
――庄内セミナーを通して

文学部１年　伊藤 拳太

事前課題として自分なりの生命について考えてみた所、真っ先に思いついたのは「死への恐怖」「生死の価値観」についての考えだった。3.11 東日本大震災で感じた死の恐怖感と命の大切さ、そして人間の絆の大切さ。それらの出来事・気づきから上記の２つの考えが自分の生命観の根幹になっていた。セミナー開始後、直ちに行われた班ごとの事前課題の話し合いを通して初めて自分のこの生命観を相対的に見る機会に恵まれた。同じ班の人の生命観を知る事で、自分の考えがとても浅く、まだ深く考える余地を多分に含むものだという事にも気づく事ができた。「生命は奇跡的で偶然的なもの」「人間の尊厳が関わる死について」「一生懸命生きようとする姿勢の話」「死の法的対応について」など、自分にとって新鮮な生命観に触れられ、自分の生命観の変化を感じ取れた。

今回のレポートを書くにあたって自分の生命観という一つの考え方には集約出来なかったので、数多くのセッションの中で自分が聞いた事・考えた事を利用して、生命について自分なりに意見を述べていきたいと思う。

〈生命の多様性の重要さ〉

井奥洪二先生の講義の中で最も印象に残った言葉で、地球という自分たちが存在している世界の中で生命を考えたとき、もっとも大切にしなくてはならない考え方である。生命を考えるとなると、人間はどうしても自分中心の生について考えを巡らせる傾向にある。地球という体系が成り立つには他の生物の多様性が無くてはならないし、そうしなければ人間を含めた生物全てが危機に陥る。また、多様性が無いという事の危険性を井奥先生は企業の投資の選択と集中の不均衡が引き起こしたリスク（ここでは半導体関係企業の話を出された）というアナロジーで分かりやすく話してくれた。生命体を定義すると、「個体を維持する機能をもち、種を維持する機能を持つ存在」と定義出来る。この言葉は地球視点で生命を考えるきっかけとなった。

〈日本文化の根底に死の克服という思想が流れている〉

この文は注連寺住職の話を聞いて自分が感じた事である。住職が話してくれた身の回りの日本の生活にとけ込んでいる風習の中には、死後の世界をより良く生きる為の思想や、死後の世界への恐怖を和らげる思想を根底に潜めている事を知った。それは先祖を大切にする美しい考えでとても人間らしい思想でとても興味をひかれた。生活の中に潜む慣習や文化の根底には、人が無意識に恐れていた死への恐怖を少しでも和らげる努力が行われていた事を知り、死を恐怖するのでは無く、慣習や文化の根底として生活の一部として受け入れる事が重要だなと考えるようになった。

〈自然への畏れ・尊敬〉

これは修験体験で、実際に修行で使われている山道を歩いていく中で感じた事だ。大きな原生林に挟まれた形の異なるでこぼこの石でできた山道を上っていくうちに、次第に自分が自然と一体化している様な感覚に陥った。自然が生み出す澄んだ空気、静けさを感じながら歩いていくうちに、自分の体が自然に溶け込み同じ感覚で鼓動している様な感じがしたのだ。その時、初めて自分は自然の偉大さを感じるのと同時に畏れと尊敬の念を持つようになった。自然と一体化していたかつての人間の感覚を体験する事ができた事で、やはり人間にとって自然は身体と同じく重要な物で生命のリズムを整える上で必要なものだと思った。

〈先端研見学と井奥先生のテクノロジーの話〉

これは、今回の話の中でこれからもっとも生命について考える上で重要になる言葉だ。先端研のメタボローム解析技術応用性の話や、井奥先生の iPS 細胞がこれからどう社会に影響を与えるのか、また科学技術の発展がもたらす倫理の問題についてなど、今回の２つのセッションのなかで未来の生命観はどう変わるかについて考える機会になった。特に、テクノロジーの進歩は最初に述べたように多様性を崩すきっかけにもなってしまうという話もあった（デザインド・ベイビー、臓器移植など）。私たちは不安定な生命観を持つ事になるかもしれない。それを避けるためには、私たちはその法的範囲を何処まで認め・許し、必要とするのか未来の視点に立って生命について考える必要がある事を知った。

〈まとめ〉

これらのいくつかの言葉・文を参考に自分なりの生命観を振り返ってみると、始めの個別的・個人的な生命観が、多様な生命観を取り入れる事で視野が広くなり、他人、他の生物、そして自然世界における生命について考える事が出来るようになった。また、人間の文化・生活の中に生死に関する思想が根底にあって、それに支えられながら毎日を生きている事が分かった事はとても支えになった。死は恐怖と一側面からのみ見るのではなく、この死を受け入れる事で恐怖を和らげる思考の様に、多面的に捉えていきたいと思う。今回の庄内セミナーで身につけた様々な生命観を元に、自分の人生の中で活かしつつ多様な生への尊敬を忘れないで生きていきたいと思う。

「生命」を考える

法学部（政治）２年　奥田 しをり

白装束に身を包み、滝に打たれ心身ともに洗われる。羽黒山の荘厳な杉並木の中 2,446 段の石段を黙々と降りていく。観光客向けに簡略化された感は否めないが、南蛮いぶしや火渡りなど他にも貴重な経験をさせて頂いた。登りの山道には足場となる石が等間隔に並べられており、その石を踏みしめ歩きながら人生について考えた。

セミナーのまとめなどでも生命を考える時のキーワードとして「つながり」が多く挙げられていた。私個人としてはつながりを重んじるよりむしろ「犀の角のように唯一人歩く」生き方をしたいと思っていた。出来るだけ誰の力も借りず、もし一時的に誰か共同で物事を進めるとしても個々の独立した存在ひいては意見や行動を前提にするべきだという志向が私の中にあった。しかし自分の力だけで歩いているようでも誰かが置いた石の上を歩いているように、わかりやすい形では誰の力も借りずに生きていると思っていても、背後で膨大な数の人々のもたらした恩恵を受けつつ生きている。石を避けて歩くことが出来たとしても、道がぬかるんでいるときは必ず石が必要となる。私が今まで石の存在や重要性に気付かなかったのは、ぬかるんだ道を通らずに来ることが出来た幸運があったからだと考えた。

その一方で今まで重要だと考えてきた個人として自立することの価値も「つながり」の価値と一見反するようではあるが共存させることができると思う。グループワークのように複数の人々が集まって何かをすることをつながりと仮定するならば、協調性が求められてくるだろう。しかし協調性だけを優先してしまうと、人任せになり個人としての意見を持たなくなったりあるいは馴れ合いのような状況を生んでしまう傾向があるように思う。ある事柄に関わる人数が増えると一人一人の責任が分散され積極性が失われるというのは傍観者効果として科学的にも立証されている。もちろん自分の考えのみが正しいという傲慢さや独りよがりになり多面性を欠くことは避けなければならないだろう。個人として自立し、目標達成のため自ら考え計画を進めていくことを軸に異なった意見や価値観の人が歩み寄り協調してより良い方向に修正を加えていく姿勢が物事に取り組む際に最善だと考えた。このようにして成果として山道の石を残していくことで、後にその道を通っていく人々と時系列を超えてつながることが出来ると思う。

後世への礎となる成果はどの分野で残されたものであっても等しく価値があるが必ず公共の福祉的な性質を持たなければならないと考えた。人は果たすべき目的があって生まれてくるのか、あるいは単なる生殖の結果として生まれてくるのかわからない。人生の意味について確かにこうであるという考えは得られなかったので自分の考えとして断言できない部分が多いが、もし生まれてくることに意味があるとするならば何か目的を果たすためであり、その目的を説明するうえでのキーワードは公共の福祉であるように思う。生命を意味付けるような目的とは世界全体を良くするという普遍的価値を持っていて、人が一生をかけても決して達成することが出来ないものである。換言すれば決して達成することが出来ないものが人生の目標であるとも言えるのではないかと考えた。達成することが出来ないとわかっているものに対して努力を続けるのは合理的ではない。しかし人生の目的に対しては非合理性を認識しながらも自分の生命を捧げざるを得ないのだろう。このことにより長い目で見れば同じ人間という種の繁栄としてつながっていくことになるのかもしれない。

庄内セミナーでの修験体験や即身仏拝観、様々な分野で活躍する人々のお話、先端生命科学研究所の見学などは生命に関して今までにない視点から考えるきっかけとなったが、それでもわからないことや矛盾することだらけである。今までは考えてみることもなく認知していなかった事項もわからないものとして認知されるようになったためむしろ疑問は深まったように思う。庄内セミナーを新たな出発点としてこれからも生命と向き合っていきたい。

生命観

経営管理研究科（修士課程）1年　折井 駿太

「苦しい」と思った。だから、私は生きていた。

これは山伏修行体験で感じた率直な感想である。本来、修行は一度死に、生まれ変わることを目的としているが、私は死ねなかったばかりか、煩悩を排除することすら難しかった。修行の行く末に得られる境地はなく、高尚かつ厳かなる真理にも辿り着けず、私はただの一修行体験者であった。短い時間の修行体験だから致し方ない、という言い訳を述べることは容易であり、却ってたくさん得られるものがあったというのは嘘っぽく聞こえる。しかし、全く何も得られなかったわけでは決してなく、得られたものはあった。それが、「生きたい」という思いである。大袈裟に聞こえるかもしれないが、私はその思いを抱き、同時にそれが強まったのだ。

その思いを抱いたのは「南蛮いぶし」の最中である。徐々に七輪からの煙が部屋に充満し、前方にある蝋燭の灯り火が朧げに映った。耳からは煙を仰ぐ、パタパタパタッという悪魔の足音の様な団扇の音、そして唱えられている念仏。異空間に入り込んだかのようであった。羽黒山山伏修行で云えばここが六道の一つ地獄。本当に苦しい。煙を吸い込めば咽せ、咳が出る。一度、咳き込めば、それが続いてしまうように、延々と苦しさが輪廻する。早くおいしい空気を吸いたい、と願うのと同時に意識を保っていないと危ない、と強く感じながら地獄に身を置いていた。その時に「生きたい」と強く思ったのだ。意識的だったのかもしれないし、無意識的に感じたのかもしれないが、生きたかった。

たとえ、修行上、死ぬことになっていても、それは宗教上の概念にすぎない。つまり、修行とはいえども、その主体行為者は生ある人間であって、苦しいものは苦しいと感じるのである。しかし、それで良いと私は考える。生きることは楽なことばかりでない。苦あれば楽あり（楽あれば苦あり）という諺の通り、生きていく上で苦しいことは多い。けれども、いつの間にか私は苦しいことを「明日までに資料作成をしなければ」や「あの上司嫌だな」といった精神的なストレスと感じ、意味付けしていた。これはこれで間違っていないと思うが、この精神的な苦しさからは「生きている」という実感を得ることはない。なぜなら、身体に苦しさを訴求することがないからだ。修行はその点、精神だけでなく身体をも苦しめる。飢餓や畜生など身体への負担は大きく、場合によっては人間の生産活動が停止してしまうかもしれないし、本当に死んでしまうかもしれない危険性もある。とにかく修行の間は苦しみとの闘いであろう。だからこそ、一つ一つ修行が終わった時、それから一瞬、解放されることで生を感じ、生きているありがたみを噛み締めるはずだ。そして、生を大切に扱う、ないしその気持ちが養成される。

修行前と後で生死について考えると、表裏一体であったその関係性が構成要素の関係であるように思えてならなくなった。つまり、生を構成するために必要な構成要素として死が存在している。これは修行前に考えていた生の対義語が死であるという認識とは異なり、生には死が必要であるという意味で反対概念ではないということだ。死があるからこそ生がある。もっと言えば死に生かされているのかもしれない。しかし、その逆—生があるからこそ死がある—があるかと問われれば、私は答えられない。そして、知る由もないだろう。なぜなら、それが判る時、私は死んでしまっているからである。生に生かされた死、とはよく分からないものだ。そう考えると生と死の関係性は単一方向であり、やはり対義語ではない。

身体的に苦しいとき、あるいは死を感じたとき、生きたいという欲求が強くなる。これが本来の人間である。瓦礫の下敷きになっていれば助けを求めるだろうし、火災建物内にいれば外への出口に逃げ向かうだろう。これらは想像でしかないが、助けを求めることは生きたいということを代替した表現ではないか。この様に生きたいという意思は様々な表現に分散し、代替されるだろうが、詰まるところは「生きたい」に集約されるのだ。また、逆のことを言えば、苦しみを感じられなければ生きたいと思う必要もそこまでなく、恐らく死に向かっていく。なぜならば、それを感じない状態は感覚が麻痺していることであり、極めて重傷であろう。生きたいと思う余裕もない中、生と死の間を弱々しく彷徨う。だからこそ、苦しみを感じ、生きたいと思えることは大変重要ではあるまいか。

以上より、私は意識的・無意識的に人間は身体的に苦しむと生きたいと思うことがプログラム化されていると仮定し、論拠として自らの修行体験を挙げた。今まで私は身体に訴える苦しさを経験したことがなかったのかもしれない。スポーツで得る苦しみや勉強によって生じる苦しみとは違う、修行の苦しみ。これは死を感じ、非常に苦しかった。だから生きたかった。

私は、人間は生かされている。その源は信仰や自然、人とのつながりではなく、鶴岡で共に議論した班員には申し訳ないが、それは苦しみや死である。生の構成要素にそれらが必要であり、生と死は対義語ではない。当初、生命から連想していた死は生の反対概念であった。しかし、今では連想される死は生のガソリンであって、必要不可欠なことである。それに苦あれば楽ありの世の中、どうせ苦しいことがあればそれは生きる上で必要なことだと前向きに捉えられた方が人生も楽しいではないか。もちろん、苦しみばかりの人生は辛いし、

望まない。ただ、適度な苦しみを、人生の節々で与えることで改めて生きたいと感じ、また生かされていることを経験することは大切だ。

生命について考えた結果、死・苦しみは怖いものではないことが判った一方で、それを感じなければ「生きたい」と正面から向き合うこと、考えることがないと分かったことに畏怖を感じた。これが私の鶴岡で得た生命観であり、同地へ赴く前のそれとの変遷を示した。

かけがえのない「生命」

商学部2年　叶内 彩香

「生命」は広辞苑第六版によると、「生物が生物として存在する本源」と定義できる。生命はすべての生き物に存在するが、一つひとつがかけがえのない、唯一無二のものだ。さらに生命は多大なエネルギーを秘めており、他者との関係性の中で生きている。これが、４日間の庄内セミナーを通じて得た「生命観」の柱だ。

まず、生命はこの世のいかなるものにも存在する。日本では古来、アニミズム信仰がなされてきた。山などの自然にも仏が宿り、虫や鳥の声にさえ神仏が宿っていると考えられた。３日目に修験体験を終えた後、羽黒修験についての講話でこのことを伺った際に私は強く共感した。自然豊かな山中を歩きながら、生命のダイナミズムを感じたのは勿論のこと、草木の一つひとつ、虫、小鳥など、あらゆるものが生命を抱いていることをも感じた。自然のものだけでなく書物、机など、通常は生きているとは考えないものにも生命は存在する。我々はそれらを「もの」だからといって残虐な扱いをしてはならず、大切にしてゆかねばならない。

ひとつの「生命」として生を賜ったものの中でどれ一つとして同じものなどなく、おのおのが個性を持つからこそ、すべての生命の存在に価値がある。それぞれが自分にしか成しえない使命を与えられてこの世に誕生した。これは、１日目のグループごとのディスカッションで、生きている意味は何かを話し合ってから４日間考えた結果、辿り着いた答えだ。人と違うからといって卑屈に感じ、のびのびと生きられなくなっては元も子もない。自分の個性はもちろんだがお互いの個性をも尊重し合いながら、自由に生を全うすべきである。

一方、生命は他者と助け合いながら共生している。「生命は

自分自身だけでは完結できないように　つくられているらしい　・・・　生命は　その中に欠如を抱き　それを他者から満たしてもらうのだ」。これは庄内文化論の講話で取り上げられた庄内出身の詩人、吉野弘氏の「生命（いのち）は」の一節である。生命は確かに不完全な存在で、それが個性となって表れる一方、単体でできることは限られており支え合いが不可欠だ。人間を考えるだけでも、日々お互いの強みを生かしつつ協力したり、励まし合ったりしている。様々な場面で他者の大切さ、かけがえのなさを感じるはずだ。自然界であっても、昆虫とお花、イソギンチャクとクマノミの例がよく取り上げられるが、あらゆるものがお互いを必要とし、助け合って生きている。今回の庄内セミナーにおいても、先生方、スタッフの方、鶴岡の方、そして他の参加者の方に支えられ、一人では絶対にできないような貴重な経験をすることができた。

生命は確かに個々の個性を大切にしてゆかねばならない。しかし個性を自分勝手に発揮してゆくだけではお互いにぶつかり合い、他者との共存を続けてゆくことはできない。だからこの自然界には秩序が必要だ。人間が秩序を乱して環境を破壊し続けている現状は大変危惧されている。温室効果ガスの過度な放出、海洋汚染など、挙げてゆくときりがないが、これは人間の単なるエゴイズムであり、生命間の共生を考えると到底許されることではない。人間同士の秩序は勿論だが、自然界全体の秩序もよく考えてゆかねばならない。

さらに庄内セミナーでは、「生命」につきものの「死」についても考えることができた。生きているものは死をまぬがれえない。私は当初漠然と、生命は死ぬと天国で安らかに過ごすと考えていた。しかし、即身仏を拝見し、講話を聴いているうちに生命は死後、後世の生命を見守るために草木の陰など地上のあらゆるところに留まる、と考えるようになった。即身仏の修験者は人々を苦しみから救うために、過酷な修行を通して仏になったそうだ。人はこのように、自らを犠牲にして他人を救済するまではゆかずとも、自らの死後、知人や子孫が安泰に暮らせるように見守り続けるのではないだろうか。過去の生命が見守ってくれていると考えると、現在を生きる私たちは心強く、死後も残した家族を見守る使命があると考えると、死を迎える恐怖も多少は和らぐはずだ。

セミナーの４日間を通して私は生命のかけがえのなさ、そして他者の存在の大きさを学んだ。このことを忘れずに死ぬまで、そして死後も安らかに生きてゆきたい。

最後になりましたが、庄内セミナーを通じて生命については勿論のこと、他にも数多くのかけがえのないものを得ることができた。厚く御礼を申し上げたい。

「生命」を考える

経済学部3年　木村 つぐみ

庄内セミナーから戻ってきて約１か月がたちました。「非日常」と呼ばれるものが好きな私は、「日常」の生活をしていることにどこか物足りなさや窮屈さを感じながらも、「日常」の大切さも頭のどこかでわかっているので、とりあえず今はこの「娑婆」で生きてみようと思っています。

セミナーに参加して自分が考えたことは大きくわけるとふたつあって、ひとつは「人は必ずいつか娑婆に戻って生活しないといけないのだな」ということ、もうひとつは「死と再生」についてです。まず前者のほうから書いていきます。

興味深かったのは、私たちが体験した一日の初心者用修行であっても、もっと本格的な一週間程度の修行（最後の夜に映像で見たやつです）であっても、いつかは必ず人間界に戻っていくことを前提としている点です。山で生まれ変わった生命は山を下り、人間界で衆生救済をおこなう存在となるのです。自然崇拝であっても、永遠に山にこもっているわけではないのです。その現実的な理由としては、「日々の生活をいとまないといけないから（仕事とかお金とか家族のことを考えると・・・）」っていうのはあると思います。でもそれだけでしょうか。仏教の教えでも、「人間界は苦しみの世界だ」とかなりはっきり言っています。それだけ明言しているのに、暗にその世界で生きることを推奨している（人間界をくぐりぬけたら涅槃の世界に行けるといった風に）のは不思議だと思いました。

人は何故、娑婆で生きないといけないのでしょうか。もっと言えば、なぜ生きないといけないのでしょうか。

セミナーの最初、班ごとの発表でどこかの班が自殺についてふれていたことがとても印象に残っています。ぎょっとする内容ではありましたが、あとから考えると、とても率直な、根源的な問いだったと思います。即身仏のように、みずからの信念で死を選び取る人だっているわけです。死ぬのって悪いことでしょうか。べつに私は「生きるのが嫌だ」と言っているわけではなく、つまりそれだけ死について考える時間が得られたことが今回のセミナーのひとつの収穫だったかなと思います。

そういったわけで、次の「死と再生」について考えたことを書いていこうと思います。セミナーの初日、鶴岡駅におりたったとき、吉永小百合さんと羽黒山五重塔がうつっているポスターを目にしました。「ひとはなぜここに来るのか。それは、きっと山が教えてくれます。」と書かれてあるのをみて、私はけっこう本気で「ぜひ教えてほしい！」と思ったものです。そして３泊４日鶴岡で過ごしていると、「教えてもらった」という感覚が強くわいてきました。なにを教えてもらったかはとても言葉で言い表せるものではなく、私はあの山で、ただただ何かに満たされていました。いったん死んで生まれ変わるというのが山伏修行の考え方ですが、私の場合はとたんに生まれ変われるほどの力もなく、自分はただ山に力をもらっていました。力をいただいていました。その力は自分の魂にそっと蓄積されて、いつか自分を本当に生まれ変わらせる原動力になる気がします。長期的な視点で見た「再生」をしていきたいと思います。

セミナーの初日、班でマインドマップをつくって見せ合ったとき、わたしは「全体的に書いてあることがポジティブだ」という評価を班員からもらいました。セミナーに参加したことによって、生と表裏の関係にある死というものや、人間界で生きるということを見つめられるようになったことはひとつの変化、すなわち再生かなと感じます。ポジティブなだけでない、深い考えを身につける一歩を踏み出せた気がします。

さいごに。色々書きましたが、色々書きながらも、やっぱり私はおいしいご飯を食べたり、外でそよ風にふかれたりすると、生きることのほのかな喜びを感じます。そして、人との出会いもやはり喜びです。とくにこのセミナーの参加者たちは、生命というとても壮大な、必ずしも実生活ですぐに役立つわけではない、そんなテーマと向かい合おうとした人たちです。そういう人たちと出会えてよかったです。セミナー解散後、私は夜行バスで帰ることになっていたので、しばらく市内をひとりでぶらぶらしていました。鶴岡市はいかにも地方都市らしくて、車の往来は激しいけれど、人通りは皆無でした。私は夕日をながめながら少し切ない気持ちになりました。ついさっきまで参加者たちとあんなにワイワイやっていたのが嘘のようでした。ひとりで過ごす時間も好きな私ですが、このときは人が恋しくなりました。生きるとは、こういう瞬間の積み重ねなのでしょう。この積み重ねが生きる希望へとつながっていくことを願います。これからも、ずっと。

「生命」を考える

法学部（政治）３年　工藤 大貴

羽黒山の石段を白装束に身を包み、皆で一列に歩いている様子を私は「山の血流」のように感じた。とめどない血の流れが、山に命を与えているようだった。

生物の血の流れは、生きている間ずっとずっと続く。血流そのものになにか目的はあるか？と言われれば、あまり思い付かない。だが目的以上に、脈脈と続くその流れというプロセスそのものが、生命を形づくっている。目的よりもプロセスが大切なんじゃないか。そんなことを石段を登り降りするなかで、私は考えていた。

人の一生もそうなのではないか。最近は、キャリア教育が盛んで中学生高校生のうちから将来について深く考えるように求められているように感じる。人生の目的を描け、と。だが、羽黒山での体験を通じて、私は多くの人を介在させる今を生きることが、つまり豊かなプロセスをつくることが、結果として豊かな生を決定づけるように感じている。

そして、多くの人を介在させる今、とは必ずしも他人との関係性を紡ぎながら生きるということではない。他人との関係性を紡ぐ、そのためには相手に自分の感情や思いを伝えて、それが伝わらなければならない。だが、伝わらないこともある。伝わらないで、相手と衝突してしまうこともある。

セミナーで吉野弘氏について話があった。吉野氏は訛りがある言葉に対する他人からのネガティブな反応を一つのキッカケにして、詩の世界へと入った。吉野氏の思いは伝わらなかったのだ。衝突により、人は屈折する。ある形に歪むのだろう。だが、その歪みこそが生命の美しさでもあるように思う。訛りを馬鹿にされなければ、その悔しさがなければ、このような素晴らしい詩は生まれなかったかもしれない。つまり、伝わらないからこそ、相手と衝突して屈折するからこそ、その人が発する美しさがあるのではないか。分かりあえなかった人が自分の生に介在することによって、屈折が美を生み、より生としての存在を確固とするように感じる。

山形滞在を通じて感じたことがある。それは、「言葉の先」にある気迫が、個としての生命を輝かせて、脈脈と生命を繋いでいくということだ。到道館を残し守り続けてきた市民、自己の命を相対化して即身仏となり綿々と地域の人の支えとなった人、庄内平野の実りを毎年欠かさず育ててきた農家。言葉ではない、気迫を込めた行動は生命を輝かせ、繋ぐと同時に、周りに感動を与える。そして、感動はまた生を感じる瞬間でもある。こうして、感動を与える人がいることで、その地域には躍動する生が好循環のように溢れるのだろう。

「言葉の先」にどんな行動を起こせるか？　そして、その行動には必ず守るべき対象があるように思う。市民が守ってきた到道館、即身仏が守った市民、農家が守ってきた家族と自然、伝統。なにかを誰かを守る、相手がいて自分がいる。そのような、他の為の価値観がまた人の生命には不可欠なのだろう。それは承認欲求なのかもしれないが、それで良いのだと思う。

私が言葉の先の行動として、なにをしていくか？　その前に、まずは「言葉」と向き合い、言葉で人に伝えたいことが伝わるようになりたいと思う。言葉は人が持っている音だ。滝の音や風の音と同じように。私は滝行中に滝の音だけが聞こえて無心になれたが、人が持っている音＝言葉は相手を無心にさせることはない。むしろ、多くのことを想起させる。だからこそ、丁寧に伝えたいことを伝える。そして、やむを得ず衝突が生まれた時には、その状況とも真摯に向き合うことで、屈折した美しさが生まれるだろう。

井奥教授の話で、動物体内で人の内臓を作る技術がiPS細胞により可能になるとあった。私はもしも、家族や大切な人が上記の技術で作った内臓移植をすれば命が助かるという場面になったら、移植してほしいと頼むと思う。同じように自分に移植が必要になってもそうするだろう。だが、私のように考える人が多ければ、歯止めが効かないまま身体がパーツ化する時代を迎えてしまうだろう。そこに大きな葛藤がある。しかし、結局はそういう場面になった時に、そこまでどのようなプロセスを歩んできたか、そしてそのプロセスの先にある道を自然に選択することが一人の人間としては間違ってないのではないか。ただ、脈脈と言葉の先にある行動を進めながら生きることで、大きな決断を迫られた時にも迷いはないように思う。そして、その決断こそがその人の生命がこの世に存在したことを証明するものになる。

生と死を織り成す、庄内の地で

文学部３年　国枝 奈々

擬死再生への試みは、滝打ちから始まった。夏だというのに水はキンキンに冷たい。そして、遠目からはか細く見えた滝は、間近で見ると怒涛そのものだった。滝の音以外何も聞こえず、目も開けていられず、冷たすぎる水は、身体の感覚を瞬間にして奪って行った。

次第に、滝の音すら遠ざかり、無音の世界に放り出される。瞼を閉じた裏側では、真っ暗な闇から次第に白く温かみのある光が広がって行く。はじめ水の冷たさに驚いて、バクバクと高鳴っていた心臓も、次第に滝のリズムを身体で理解したかのようにそれに合わせて鼓動を始める。時の感覚が無くなり、「他」と「私」の区別も曖昧になる。あらゆる境界線が薄れて行く。それは、「私は私、他人は他人。」という孤独な思考ではなくて、私があらゆる総体の一部になり、自分を生かしているその総体を肌で直に感じる不思議な経験だった。

白装束の一行は、羽黒山へ向かう。前日雨が降ったせいで、ぬかるんだ道でも、板や飛び石が敷いてあるのはこの山で修行をしている山伏たちのお陰だ。囲まれた木々の息遣いの生々しさが充満する中、傾斜のなだらかな山というよりも森の中を黙々と踏みしめて歩いて行く。木々はいずれも、何十年も時を経て太く天を目指している。地から得たものを自らの身体を通して再び天へ返上する。その敬虔な姿には、生きることの全てがそこに収斂されているかのような圧倒的な美しさがあった。おそらく木々は、神も仏も天国も地獄も、知らない。知らないだろうが、人がこざかしい概念で知ったかぶりをしているこの間にも、木たちは着実に世の中の全てを知って行くのだ。自らの使命を良く理解して生きる木々の強さが、この土地の強さとなって足元から這い上がってくる感覚を受けた。

本来の修験は月山、羽黒山、湯殿山といった過去、現世、未来のそれぞれの浄土である山々を９日間かけ、まさに生と死を行き来するかのような激しい修行を繰り返す過酷な旅とされる。出羽の山々によって構成されているこの巨大な曼荼羅は、入峰する者に戒めを与える、厳格な秩序を形成している。

柳田國男が想定するところでは、死後他界としての山は固有信仰の要素と考えられ、先祖の霊は山中に留まり33年を経ることで、ケガレが清まって山の神となり、春になると麓に降りて子孫の営む農耕を田の神として守護し、秋の収穫が済むと村の人々の饗応を受けて再び山に帰る、という。すなわちこの地では、草木石、全てに神が宿り、虫や鳥、風が奏でる音の全てが仏の教えと伝えられてきた。神も仏も区別はなく、もともとは先祖の霊であるため、神や仏の宿った自然は全て、先に死んで逝った人々がもたらしてくれた恵みなのだ。

山やそこに住む神や仏、祖先の霊とともに、庄内で暮らす人々に目を転じると、そこには『花よりも根を養う』生き方が脈々と受け継がれていることが分かる。目立って華やかなことに気を取られるのではなく、じっくりと根をはり、内なる力を静かに充実させて、より豊かに実を結ばせるその堅実さこそが庄内の郷風だとされる。それは、学問にも産業にも表れていた。

荻生徂徠の教えをもとに編み出された庄内論語は、今でもこの地域の教育を支える支柱になっている。論語を学ぶ者は、庄内地方の独特な調子で素読をしたのち、実際に実生活において論語で学んだ内容をどれだけ実践に繋げられるかという、「風味」が非常に重要とされた。学問は、訓詁注釈に流れた空理空論ではなく、生活の実際に役立つ実学、活学でなければならないとここでは教えられる。表面的な理解ではなく、実践に移さなければ本当に知ったことにはならないのだという考え方は、学問が、人に与えられた使命を全うするという美しい生き方へと直接的に繋がっていることを示している。

歴史の中では、戊辰戦争終結後維新の改革が次々と打ち出される中で、士族たちが職や禄とを失い、受難を負った時期もあった。そしてこの受難の時代をバネに、人々は月山の麓に広がる原生林の開墾と、蚕糸業を興し、文明開化を迎える国に報じて行った。

こう見て行くと、庄内の人々がかつて『沈潜の風の民』と呼ばれていたことも深く納得できる。人に与えられた使命とは、善く生きるということなのだ。それは、個人主義や利己主義のもとで幸せを掴むというのとは全く違い、自分を生かしている自然や環境、そして周囲にいる人々全てを巻き込んで一体化して生きるということだ。だから、ちょっとやそっとの苦難では、びくともしない丈夫な社会や人間性がこの地では培われている。

現代を生きる者は何かと時間を気にして生きることが多い。革新的な科学技術などを目の当たりにすると、誰も見たことがない死というものを、きっと解明し超越できると、そう信じて明日や明後日の事ばかりを気にしてしまいがちになる。今を生きることが、一体どれほど厳しく実り豊かであるかということを、庄内では心身ともに学ぶことができる。

「生命」を考える

理工学部2年　熊田 匡仁

事前課題でも述べたように、私は普段都会周辺でこれまで生活してきて、小学校２年生のときに夜、自分自身の生と死について自問自答して以来、生と死についてまともに考えたことはなく、避けていたところがあった。よって、今回のセミナーではそれについてじっくりと再び考え、自身の死生観を少しでも形づくることを目標にした。そこで、3泊４日のセミナーの中で自身の死生観について考えるヒントとなった出来事を振り返ってみたいと思う。

初日、４～５人のグループをつくり、まず、個々人で生命という言葉を中心に添えたマインドマップを作成した後、互いに各々が作成したものを共有したのだが、他のメンバーの中に生命を哲学から宗教に結び付けている人や読書から図書館に結び付けている人がいた。自分ではすぐに思いつかなかった言葉だったため、「そういう見方もあるのか。」と思わず考えさせられた。

その後、互いの事前課題を共有したのだが、他のメンバーの中に「海外旅行をきっかけに昆虫食やゲテモノ料理に凝った時期があった。生前の姿を留めた食品を味わうことで、私たち人間は他の命を食べることで生き延びているのだという普段無意識のうちに日常化してきている事実が、やけに生々しい実体験として、舌に記憶される。」と書いている人がいて、なるほどと思った。これを逆に考えると普段、都会人は加工食品を食すことが多いため、自身の想像以上に食物の命に対する意識が薄れつつあるということだ。実際に私も完食せず、残すことがよくあることを思うと、命をいただいているという意識が薄れていることを再認識させられた。また、別の人で「自殺がなぜいけないのかについて自分なりに答えを出したい。」ということを目標にしている人がいて、ある人が「もともとなぜ自殺はいけないのか、自殺を肯定すると……」と言い、話題が「生と死」から「自分の死を自らの意志で決められる自殺は、果たして本当に悪いことなのだろうか？」に移っていった。結局、「生命について考える」というとてつもなく広く、壮大なテーマであったためグループセッションで挙がった話をまとめるとことはできなかったのだが、自分だけの議論に留まらず、他の人と議論を交わすことの面白さを改めて実感した。

初日の夜には、経済学部教授の井奥先生の講義を聴いた。自分はこの講義の一週間前の８月の中旬にたまたま深夜のBSプレミアムで３夜連続の再放送の「地球大進化」という番組を見た。この番組は、地球は誕生以来、生物に絶えず試練を与え続け、極度の酸欠状態による１度目の大量絶滅と隕石の衝突による２度目の大量絶滅をその都度に応じた進化により、かろうじてその試練を乗り越えてきた軌跡を壮大なスケールで描いたものであったのだが、先生の講義を聴いている途中に、その番組の映像がまざまざと脳裏に蘇ってきてより、リアリティーあるものに感じるとともに、地球46億年の歴史の中に、現在に至るまで、環境変化に応じて遺伝子を変異させてきた生物の遺伝子を高々数百年の歴史しか持たない人類が恣意的に操作することがいかに恐ろしいことであるかを今一度考えさせられた。そして、これからの時代は、文系と理系の両方をしっかりと学んだ上で問題解決にあたらなければ、到底太刀打ちできないことを実感した。

３日目は、修験体験をした。修験の目的は、大自然の生命に触れ、共に生命を共有する感覚や体験を通じて、身体に新たな力を宿すことであり、修験者は山に入る前に、形式的に一度死んだこととし、修験を通じて復活するのである。実際に体験して、滝行では非常に冷たい流水がひたすら背中を打ち、身体をさすような冷たさのあまり普段慣れ親しんでいる水に畏怖の念を抱き、水がまるで生きているかのように感ぜられた。また、羽黒山山頂までの山登りでは、体力的には問題なかったのだが、精神的に辛かったと記憶している。特に、上りはまだしも、急勾配な石段をひたすら下り続ける下りがあまりの単調さに心が正直折れそうであった。無の境地になったものの、なかなか長続きさせることができなかったのである。そんな中、並木道を下っている際に周りの木々が急勾配な斜面に悠然と立ち並んでいるさまがなぜか感慨深く印象に残っている。普段、日吉の並木道を何の感慨もなく、ただ歩いていたことを思うと人間その時々の置かれている状況によって、見えてくる視野が全然違うのだとつくづく実感した。修験体験終了後、なんだか心身ともにすっきりした感覚も覚えた。今から思えば、やはりこのセミナーの中で自分が一番自然について考えさせられたイベントであったと心から思う。

４日目は、慶應義塾大学先端生命科学研究所内の施設を見学した。蜘蛛の糸を遺伝子操作により、人工でつくる科学技術に関する話題に理系人として興味をそそられる一方で、初日から３日間で自然を直に肌に感じた自分にとって、遺伝子操作に対して何か違和感を覚えた。３日間の自然との触れ合いがなければ、前者の感情しか芽生えなかったであろう。そう考えると自分自身の価値観が少し変わったのかもしれないと思った。

その後、初日と同様に「生命」を中心の言葉としたマインドマップを再び作成し、グループのメンバーとそれぞれのマインドマップについて、検討した。私のマインドマップは、初日と比べて殆ど同じ内容の言葉を書き連ねていた。た

だ、初日とは異なり、一つ一つの言葉に実感を持って書いたため、まるで4日間の出来事がマインドマップに詰まっているようであった。また、メンバーとの話し合いでは、修験体験の話題になり、生まれ、変わるところまではいかなかったものの、なんだかスッキリしたという感想で一致したことが印象に残っている。

以上のヒントを通して、自らの「生」と「死」について、思いを馳せると、人は生きているときは生きていることについてそこまで深刻に考えなく、死について考えるものである。逆に、死というものを意識したとき、初めて自らの生について面と向かって考えるのである。つまり、2つのうち一方の状況の中にいるともう一方が自ずと見えてくるはずなのだが、最近の私は特に普段身近に死を意識することがなく、不自由なく生きていることが、当たり前であるかのように日々生活してきた。また、我々が生きている自然環境との付き合い方についても顧みることは殆どなく、あるのが当然のものとして生活してきた。しかし、今回のセミナーを通じて、非日常的環境で暮らすことで生きているということや、普段の生活でありふれたものの貴重さ、そして、普段触れている自然に対する畏怖を改めて肌で感じたとともに、自分のこれまでの視野の狭さを痛感した。

非日常的環境で暮らすことで言えば、庄内地方の時間の流れは我々が普段都会で生活しているときに感じる時間の流れに比べ、穏やかにゆっくり流れていると感じた。普段の生活では、特に用事がなくても時間を意識し、せかされ、憂鬱に感じることがよくあるが、この地方で過ごすと自然を直に感じられるためか、時間をあまり気にしなくなるのである。もしかしたら、修験体験の後、心身ともにすっきりと落ち着いた気分になったのは、まさにこのためかもしれない。

また、自然に対する恐怖や畏怖の念は、先の東日本大震災や直近の広島の大規模土砂災害でメディアを通じて既に感じていたものの、どうしても自身の身に直接襲いかかったことではないために、他人事と考えてしまう自分がいたのだが、実際に山伏体験をして、人間では到底かなわない自然の強大なパワーをまざまざと肌で感じることで、当事者意識を持つことができ、下手に自然に抗うものではないのだ、自然に生かしていただいているのだと心から思うようになった。

まとめると、人は、普段生活している環境をしばらく離れて非日常的環境で生活することで、普段の生活とのギャップを意識するようになり、普段の生活の些細なことにまで目が行き届くようになる。そして、自分自身の生き方について顧みることができるのだと思う。ゆえに、今回のようなセミナーは自身の死生観を見つめる良い機会であった。自分の中にあった自然に対する見方が変わったことが今回のセミナーの自身の成果であると考える。

参考文献：

人はなぜ修験に向かうのか？　山伏入門　　宮城泰年監修
3班のメンバーの事前課題（谷　昭仁、高林一樹、矢部絵莉香、佐々木凌）
慶應義塾大学文学部教授　鈴木正崇先生の講義資料「羽黒修験」

「生命」を考える

理工学部２年　小杉 拓磨

今回の庄内セミナーでは様々な体験をした。江戸時代を中心に庄内地方で行われた、この土地特有のものともいえる即身仏を目の当たりにしたり、藩校の致道館で庄内論語の素読を体験したりした。また、夜には様々な分野の先生方から貴重なお話を聞いたりした。このように庄内地方独特の体験をすることができた中で、最も印象に残っているのはやはり三日目に行った修験体験である。今回のセミナーの体験はどれも普段の生活では触れることのないものばかりであったが、その中でもこの修験体験は私にとって大きな意味を持つ経験となった。これは昔から続いている修行であり、しかも文書などではなく、実体験として受け継がれている。このような受け継がれ方は私にとっては新鮮で、そこに体験と言う形ではあれ、関われたことが大変うれしい。そして、もっと本格的な修験を経験したいとも思った。

これらの体験を通して、私が生命について強く思ったことはいくつかある。一つはその輝きについてである。即身仏になった人は当時の飢饉から地域を救う手段として自らが死に、仏となることを選んでいる。初め、私はこのような行動は自身の生命を軽んじた浅はかなものなのではないかと疑っていた。しかし、即身仏になるまでの苦行を知り、実際に即身仏を見て、彼から一種の誇りのようなものを感じた。地域の人々を救うことができるなら、自らに課す苦行や生命など安いものだ、むしろ彼の過ごしてきた環境を取り戻すことは自分の生命を懸ける価値があると考えたのではないだろうか。このような使命感を帯びて行動するとき、生命は輝きを放つように思える。例え一瞬ではあっても強い輝きを放った生命は後世まで影響を与える。注連寺で拝観した即身仏はまさにそのいい例である。生命が潰えたにもかかわらず多くの人から崇められ、後世まで生き続けている。使命とは命を使うこと、つまり、命を輝かせることである。輝きを放った生命は往々にして天寿を全うできない。しかし、ただ単に生命を授かり、そして死ぬことで終わる人生とは全く別の生き方をしている。このような生き方を自らの意志で選ぶ人がいることに衝撃を受けた。また、人生という枠を超えた生命のあり方に興味を持った。

二つ目は、すでに少し触れているが、目に見える生命だけではなく、自然そのものを生命と捉える考え方だ。修験とは自然に身を置き、一体となることを目指すものだと聞いた。実際に修験体験をして、わずかながらその境地が理解できた。山に生命が宿るという考え方は日本に古来よりある発想として認識していた。ただ、それについて深く考えたことはなく、生命観についての一つの考え方だというくらいにしかとらえていなかった。しかし、修験体験を通して自然のエネルギーを感じることにより、少し考えが変わった。ここで言う自然のエネルギーとは羽黒山参道のにおいであったり、そこを山伏の姿で歩く行列であったり、滝に打たれて冷たさの中にぬくもりを感じ、気持ちが一新されるような感覚であったりするもののことである。このように自然と触れ合うことにより伝わってくるエネルギーのことを自然の持つ生命と捉えているのではないだろうか。だとしたら生命とは決して一個の動物が有する小さなもののことを指すとは限らないということになる。一個の動物が生まれ、死にゆく姿はそれ単体では決して見ることのできない現象である。そこに関わるものすべてがあって初めて成り立つ現象であり、そのすべてと言うのが自然のことである。ところが、大自然が長い年月をかけて作り出した一部にすぎない生物を見て、人間はそこに生命が宿っているのかどうかを判断しようとしている。それが消えると悲しみ、生まれると喜ぶ。自身もその一部にすぎないからこそ、同等の価値を持つと思われる他の生物もしくは人間を見て、それが生命なのではないかと期待を込めてとらえようとする。確かにそこに生命を探そうとするのは本能的にも理解できることではあるが、それではいつまでたっても生命が何なのかを知ることはできない。

このような考えを持っていたのだとしたら、注連寺の即身仏となった方がとった行動はある意味当然のことであり、運命であったのかもしれない。運命とはあくまで命を運ぶことであり、命が運ばれることでは決してない。運命をネガティブに捉える人は後者であると考えている。自分の意志ではどうしようもできないものだと考えている。しかし、運命をポジティブのものと考える人は、実際は自らの意志で運ぶことだと知っているので、どのような環境でもそれを受け入れ自分のものにしようとしている。今回の庄内セミナーで触れた即身仏や修験体験などからは、このように生命に対する前向きさが感じられた。私が今回生命について最も強く感じたことはこの前向きさである。生命とは大自然がもつ壮大なもの、しかし、それを感じ、考えるのはその一部にすぎない人間であるため、生命を考える上で欠かせないものがこの前向きさである。

「生命」を考える

法学部（法律）４年　小東 弘毅

私の「生きること」に関する考察は、庄内セミナーを通して変化を遂げました。その変化は、決してセミナーに参加する前から持っていた自己の考えを否定するものではなく、様々な気付きによって、より考えを前進させるものでした。

私はセミナーに参加する前には、「生きること」というキーワードに対して、医学や倫理といった、学術的なもの、高尚なものをイメージしました。「生きること」という漠然とした言葉から、そのようなイメージを引き出すことは間違ったことではありませんが、自分の生活から少し離れた、「他人事の生」について考えていたように思います。今回のセミナーを通して、私は、人との交流や文化など、自分に最も身近なところで「生きること」について考察することができると気付きました。地域の食文化を堪能し、地元の人と意見を交換し、山伏の体験をする。このような自分の五感で感じたことを、そのまま「生きること」の考察の参考にすることができ、また、そのようにして到達した考えが、より自分の人生に直結した「生きること」であると考えました。そして、自分の体験を参考に、生きることについて考えた結果、「幸福の感受には制限が必要不可欠である」「記憶は自分なりの生命観の形成に必須である」ということに気付きました。

私は、事前課題の中で、人は様々な事象に対して喜怒哀楽によって応答することで「生」を感じることができると述べました。しかし、セミナーを通して、人はただ喜怒哀楽を表現しているだけでは「生きている」と実感することはできないと思いました。何かを成し遂げることなく、周りの出来事に対して笑ったり泣いたりしているだけでは、充足感を得ることはできないからです。人は、自分の追い求める理想を実現することで、「生きている」と実感することができ、その結果、泣いたり笑ったりするのだと思いました。つまり、「生きること」とは幸福の追求であり、喜怒哀楽は幸福を追い求めた結果に対する表現なのです。また、追い求める理想とは各人によって種類や規模が異なると考えています。美味しい物を食べたいという理想を掲げる人もいれば自分の思想を広め、地域の教育に生かしたいという理想を掲げる人もいます。人は、それぞれが持つ無数の理想を実現するため、活動し続けています。

話を戻して、セミナーを通して得た、「幸福の感受には制限が必要不可欠である」という考えですが、これは主に修験道体験を通して感じたことです。「生きること」が理想を追い求め、幸福を実現することであれば、人はわざわざ滝に打たれ、断食する必要はありません。しかし、このような経験を通すことで、何気ない日常に対する「ありがたさ」を感じることができます。断食という制限がなければ食べ物のありがたさに気付くことはありませんし、南蛮いぶしという制限がなければ空気の美味しさに気付くことはありません。生活する上で当たり前だと思われることに自ら制限をかけることで、人は当たり前を、理想の幸福として感受することができます。この、制限を課すことで幸福が感受できるという構造は、修験道に限ったことではないと思います。人は、高い目標や立ちはだかる壁を乗り越えた時に達成感を得ることができますが、この高い目標や立ちはだかる壁も制限であり、達成感は幸福であると思います。人は達成感という幸福を得る為に、自ら辛い出来事に立ち向かうのだと思います。

また、「生きること」には「記憶」が大きな影響を与えていると思いました。庄内セミナーを終えてから一カ月が経ち、大学生活最後の夏休みは終わってしまいましたが、このセミナーのことを思い出すと今でも気持ちが満たされます。学年も学部も異なる見ず知らずの学生と一つの目的のために行動し、初めて見聞きする地域の文化や修行の体験を共有した四日間は、私の大学生活に大きな充足感をもたらしてくれました。このような貴重な経験を積み重ねた人と、何気ない人生を送った人とが、自分の人生を振り返った時に、「人生を生き抜いたな」と思えるのは明らかに前者だと思います。貴重な経験の最中には、瞬間的、直感的な満足感を得ることができますが、人生の終盤においては、そのような経験は「記憶」として蘇り、再び「生きること」とは何だったのかを考えさせてくれると思います。

上記の二つが今回の庄内セミナーを通して得た私の「生命観」です。この考察を今後の実生活に活かすとすれば、「進んで高い壁に向かい、良い経験を積み重ねるべき」なのだと思います。このようなことを、私の祖父母も口酸っぱく言っていました。「若いうちは、苦労は買ってでもしろ」。人生を生き抜いた祖父母が掲げる教訓を、庄内セミナーを通して再び考えさせられたことに少しばかり驚きを感じました。

主観的な生死とは

理工学部２年　坂口　広

現代社会において実用的な観点から生死について論ずるとき、魂だの精神だのというのは抜きで語られることが多い。生命の死とは心臓の活動等の現象が不可逆的に停止する事、もっと微細に見れば体内の複雑な化学反応の循環が途切れる事であるし、生きている状態とは各種の化学反応の途方もない連鎖、循環が起きている事である。私はこれまでこの考えを支持してきており、庄内セミナーを終えた今でも基本的には変わっていない。

だがこの発想には客観的な観点しかない。例えばこの発想においては自分の体すらも自然現象の１つでしかない。真理であると思われる。だがそのことは平時様々に苦しみながらも生きている我々に何をもたらすか。自分のちっぽけさを頭で痛感する人もいるだろう。偶然の産物によってここまでの複雑な仕組みを生み出した自然に敬意を払い、生に邁進する人もいるかも知れない。私はそんなものだろうと冷めた見方をしつつも虚無感、徒労感を抱く。我々の生は単なる現象なのだ。死については更に主観と大きなギャップがある。生から死への移行も客観的には１つの現象に過ぎないが主観的には現象の域を逸脱している。死に伴う恐怖の感情もまた現象に過ぎないが、それも現象と呼ぶに抵抗のある人は多かろう。それらを現象と見ればその操作も淡々と進む筈だが、実際は議論を呼ぶテーマである。

生とは何か、死とは何か。人々はこうした素朴な難問にどう答えるのか。セミナー内では様々にこの問いに直接、また間接的に関わる経験があった。

まず井奥氏の講演が挙げられる。生命倫理に関する内容が主であったがその中で氏は生命の定義として個体維持と種の保存という２要素を挙げている。一般的な定義だ。また、仮にロボットが自力でこの２要素を行えるようになればそれはやはり生命だと述べている。ここで私はセミナー開始直前に加茂水族館で見たベニクラゲを思い出した。ベニクラゲは寿命のないクラゲとして知られる。成体になった後ポリプの状態に戻る。10回ものポリプ化に成功したという報告もある。生命の定義に反する事例ではない。冒頭で述べた各種化学反応の循環を生とするという考えとも祖語は生じない。ではこのクラゲは主観的に「生き続けている」と言えるか……クラゲに主観が存在しない以上この疑問は意味を持たない。では、人間がある程度老化すると幼児に戻るとしたらどうか。私は「記憶の連続性」が重要になると考える。若返ってもそれ以前の記憶が完全に無くなってしまうのなら主観的には死んだも同然だ。生まれ変わっただけと言える。

氏は近年発展著しいiPS細胞などの倫理的問題点にも何点か言及している。特に印象に残ったのはiPS細胞を用いてヒトの臓器を作る場合一旦ブタの胎児に移植する点だ。ブタを道具としか見ていないという動物愛護の観点、ブタの体内にあった物を体内で長期間使う事に対する心理的抵抗があるという。尤も私はこの点は大きな問題にはならないと思う。食用に育てられているブタとの差は無いと思うし、移植を受ける人間は生命の瀬戸際にある事が多いので抵抗感を気にしている場合ではない。ただし動物の権利という観点から見ると捕鯨への批判など線引きの難しい問題を孕んでいる。

また、即身仏見学も本セミナーを通じて生と死とを考える上で一つの要素であった。即身仏修行は厳しい密教の修行の中でも極端な例と言えるもので、最終的には自身をミイラ化するものだ。彼らは身体的、精神的な永遠の命を獲得し、以って衆生を救う事を目指したのだ。当時は人々を助ける為にそれがベストだと思われたのだろう。現代社会ではそのような根拠に乏しい形での自己犠牲は無駄死にだが、当時、少なくとも入定前の密教僧には死ではなく永遠の生への扉と思われていた。それだけ主観的な死はぶれるのだ。

修験体験やそれに関する講演の中にも生死に触れる機会があった。本格的な修験の一つでは山伏達は自身の葬式を挙げ、死に装束たる白装束姿となる。十界を体験するなどの目的の修行をした後修験は羽黒山の石段を駆け下り、産湯たる火を飛び越して再び生まれる事で終了する。ここでは即身仏における生と同様に死というものを主観的に見ており、形式的なものになっている。体験においては白装束を着た後滝行､山道･参道歩き、瞑想、南蛮燻、火渡りを行った。滝行では流れ落ちる水に身を任せ、自然との同化の感覚の片鱗を味わった。昔はこのようなところからも人間が自然の一部と認識したのかも知れない。また、滝行は瞑想とともに雑念を振り払う効果がある。これは羽黒山で秋口に行われる八朔祭で山伏が唱えていた「諸々の罪穢れ祓い清めて清々し」の文句と重なる。１度死んで生まれ変わる最中における浄化の役割があるのだろう。南蛮燻は密教の地獄界を体現するべく刺激性の香をたく修行である。次第に煙と涙で部屋の前方の蝋燭が霞み、呼吸を整えないと咳が止まらなくなりそうだ。日常当然のものと思っている呼吸を制限する、印象的な経験だった。全体として体験であって、基本的に身体的な負荷しかなかった為か個人的にはさほど苦しいものとはなっていなかったと思うが、密度の濃い時間であった。

生とは何か、死とは何か。冒頭で述べたとおり客観的にはやはり広義での物理的な現象の循環に帰着すると考えるのが私には説得力を持って感じられる。主観的にはどうか。時

代などに伴う外的要因、例えば社会通念によって左右される。現代では死である即身仏は生、生である修験は死であった。一方現代を生きる私はクラゲの例から辿り着いた「記憶の連続」が主観的な生となっているのだと思う。そして記憶の形成の為には記憶を認識する為に意識が重要だ。こう考えると記憶や意識の稀薄・もしくは無い細菌や植物は殆ど生きていないと言える。また、イルカやサルといったいわゆる高等生物は人間と大差ないと言える。動物の権利などを考える際にもこう考えると主観的な理解がしやすい。伝統的な生死は時に客観的な生死と逆となる。主観的なものは客観的なそれと多分にずれるものなのだ。

豊かな自然と文化、人に恵まれた庄内での経験もまた、記憶になり、主観的な生の一部となっている。

「生命」を考える
――庄内セミナーに参加して

法学部（政治）1年　佐々木　凌

セミナー期間中に言わずじまいになってしまったが、私が「生命」について考えたいと思い、今回参加したきっかけは今年4月末に父ががんで急死したことだった。「人はなぜ死ぬのか？しかも、なぜ100歳を超えても生き続けることが許される人間と、80年どころか60年すら生きることが許されなかった人間がいるのか？」そして、「残された自分はどう生きていけばいいのか？」父の死以降この問いにずっと一人で向き合ってきた。何か答えを掴めるのではないかと思い、3泊4日の庄内セミナーに臨んだ。

鶴岡の地で、様々な経験をした今となっても、この問いの答えはまだ出ていない。むしろ、体験や学びを通じて様々考えるうちに逆にわからなくなったことも多い。この問いの答えは、3泊4日などでは決して出すことはできず、一生をかけて見つけていかなければならないものなのだと思う。しかし、今回の体験を通じ、私の生命観は明らかに変化したように思う。セミナー前後に作成した2つのマインドマップを基に、私の生命観がどう変わったのか、なぜ変わったのかを振り返るとともに、もう一度「人はなぜ死ぬのか？」「生命を考える意味とは何であるのか？」について考えていきたいと思う。

2つのマインドマップを見比べてみて、一番の違いは「生命」を考える視点だ。セミナー前は、「生命」について、出生、入学、卒業、就職、退職、老い、死・・・といったように一人の人生を中心に考えていた。これは、私が「生命」について考えるようになったきっかけが自分自身の経験であることや、普段誰と相談するでもなく一人で考えていたからだと思う。しかし、セミナー後のマインドマップでは、「生命」というワードから、「自然・環境」というワードが真っ先に浮かぶようになった。これには自分でも意外だったが、その後の話し合いで、班の他のメンバーも全員が同じ言葉をつなげていたことにはもっと驚いた。このように、個人中心の生命観から環境中心、つまり自然や他者とのつながりを重視する生命観へと変化した原因は、庄内セミナーでの体験、それも一つではなく様々な体験であったのではないかと思う。まず真っ先に浮かぶのは、3日目の修験体験だ。滝打ちでは、夏場にもかかわらず想像以上に水が冷たく、痛ささえ感じたが、だんだんと耐えるにつれ、冷たさを感じなくなってきて、最後には温かく感じたほどだった。そして、当たっている間、自分の中にたまっていたモヤモヤが消えていき、代わりに「気」、水のパワーや山のパワーを感じた。また、羽黒山を無心で歩いている時は、自然と一体になったような気分になり、どうしてこの山が古くから人々の信仰を集めてきたのかが、分かったような気がした。自然豊かな鶴岡の空気を吸い、芋煮をはじめとする庄内の味覚を満喫したことも大きかった。東京や横浜で、コンクリートに囲まれて暮らしているだけでは、人は自然に生かされているという大切なことを忘れてしまう。それでは、人生も殺伐としたものになってしまうし、自分の本当の力を発揮することも出来ないのではないかと思う。これからも、人は自然に生かされていることを忘れず、積極的に自然とかかわる機会を持たなくてはいけないと思った。自然だけでなく、人とのつながりの大切さも、改めて感じた。庄内セミナーでは、普段あまりかかわりのないような他学部の方や、上級生の方々ともたくさんの話をすることが出来てとてもよかった。個性的な人たちも多く、様々な価値観に触れられたことで、自分一人では思いつかなかったであろう考えがたくさん浮かんだ。人は一人では生きていけない動物である。生き方は一人ひとり違ったとしても、一人だけで考えていては答えは出ず、話し合いが重要なのだと思った。

もう一つ大きく変わったのは「死」についての考え方だ。「死」は終わりではなく、始まりでもあり、だからこそ自分から簡単に受け入れてはいけないものなのだと思った。鈴木教授の講義で、実際の山伏修験体験では、新たに生まれ変わるために、まず自分たちの葬式をすることを知った。これは、これまでの日本人が、「死」を生の世界から切り離すことな

く、死後の世界を忌み嫌わずに、現世から近いものとして考えてきたことの表れではないかと思う。私はこれまで、「死」はすべての終わりであると考えており、だからこそ、うまくいかないことがある度に、「死にたい」と逃げる先にあるものとして「死」をとらえてきた。しかし、修験を通して古来の日本の死生観や、飢饉などの禍で苦しむ人々を救うため即身仏となった聖人の覚悟に触れるにあたって、この考えは誤りであると感じるようになった。日本人にとって「死」とは、一方では私たちの世界に寄りそっている身近なものであり、一方で、近いからこそ簡単に踏み入れてはならない尊ぶべき存在であったのではないかと思う。

私たち大学生にとって、生や死について考える機会はあまりにも少ない。しかし「よく生きる」ためには、これは避けては通れないものだと思う。だからこそ、今回の体験はとても貴重なものであったし、これからの人生でいつか必ず役に立つものだと思っている。

また、今回感じたことは、「生命」について考えるには、「無」にならなくてはいけないということだ。「無」になるとは、何も考えないこととは違う。忙しく回っている大学生活において、無になる機会は決して多くはないが、少しでも「無」になれる瞬間を大切にして、これからの大学生活を送っていきたい。

「生命」を考える

経法学部（政治）２年　佐々木 陽菜

普段「考える」ことを避けがちな問題について考えたい。それが、今回の庄内セミナーに私が参加した一番の理由でした。正直最近の私は、日常生活が楽しいからかもしれませんが、就職や結婚といった自分の将来像や現在の日本で生じている歴史や政治などの複雑な問題について、あまり考えようとしません。きらきらした大きな夢を抱いて大学合格を目指し、毎日様々なニュースにも問題意識を向けていた高校時代と比較すると、自分の有様に失望してしまいます。そのような中、「生きることを考える」庄内セミナーに参加することで、哲学的な深い問題を「思考する」とともに、意識高い学生と対話をしながら自分の人生を見つめ直したい、と思ったのです。

このセミナーを通して、慶應義塾における新しい交友関係を広げたいという想いもありました。普段、私は大学における授業の他、部活動を中心に小さなコミュニティーの中で日々を送っているため、価値観も縛られてしまっています。コミュニティーから一歩外に出て、新しい環境に身をおいたり新しい活動に挑戦したりすることが必要だと自分自身実感していたのです。庄内セミナーは、社交力や対話力の向上を一つの趣旨とする点において、私の意向と合致していました。

こういった経緯でセミナーに参加したため、確固とした生命観が私にあったわけではありません。私は事前課題のテーマ『生命の源と死を想い、「生きること」を考える』への解答を少々困難に感じました。まず人類共通の生きる意味を探そうとしたものの、答えは見つかりませんでした。生きる意味は普遍的なものではないのでしょう。そこで、なぜ今生き続けたいと思っているのか、どういうときに死にたくなるだろうか、と自身に問いかけました。私が思いついたのは、「生きること」が自身と他人を支える手段であるということです。私は他者を愛さずして、他者との関係を断絶して生活するのは難しいと感じていますし、おそらく多くの人々もそうでしょう。私自身は最も家族から自分が大切な存在として捉えられているからこそ、死にたくないです。大切な存在を幸せにするためには自分が必要であると実感するからこそ、生きたいと思うのです。

実際にセミナーの参加者と「生命」について話しあった際、まず自分と他者の考え方の相違を実感しました。それは、多くの人が周りに「生」を「死」に照らし合わせて考えているということです。班で各自がマインドマップを作成するため、「生命」からブレインストリーミングしていったところ、直接的に「死」やそれと関連する「痛み」「苦しみ」などマイナスの言葉が多く挙がっていたのです。そういった言葉を全く連想しなかったので、私は少々驚きました。その後、それぞれの事前課題について各自が紹介した際、初めて自分の無知に気づいたのです。周りには、解剖医のお父様のもとで人間の臓器を見たことがある方や東日本大震災で大切な方を亡くされた方がいて、「死」と直面する機会または「死」について考える機会が多かったのでしょう。私はまだ物心がついてから大切な人を亡くしたことがありません。ですので、はっきり言って「死」を深く感じたことなどなく、他の人より経験値が低いと言えるかもしれません。いずれ私もそうしたことを経験するのでしょうが、今の私だからこそ持てる自身の正直な生命観も大切にしようと思いました。

マインドマップ作成後、１日目の夜から４日目にかけて、

ゲストの方々による講演、庄内の街巡りや山伏修行、先端科学研究所の見学などが行われました。そこでは、科学や仏教、神道、文化など様々な視点から「生死」を知り見つめる機会が与えられました。中でも私が気になったのは、即身仏の生き方です。経済学部の井奥洪二教授によると、即身仏は4大飢饉の江戸時代に特徴的に多く、衆生救助のために栄養源を削って生きたまま土中に入り、瞑想状態のまま絶命しミイラ化したものであるそうです。なぜ歴史的な即身仏は即身仏になる道を選んだのでしょうか。初めは、それが私にとって一番の疑問でしたが、セミナーを通しておそらく彼らは世のためになることを生きる上で重要視していたのであろうと考えました。所詮生きる上での意味など人それぞれなので、たとえば宗教といった自分の確固たる生き方を尊重しつつ、私たちが様々な考えを許容していく必要性を実感しました。

こうした体験から思うのは、「生きること」はやはり人それぞれで、当人にとって「生きがい」を見つけることが重要だということです。即身仏が世のために身を削ることも一種の「生きがい」だったと言えるかもしれません。私が当初考えていた他者と自分を愛することも立派なものです。これは人々によって相違するけれども、一方で最低限人間として生きる上でごく普通のこと、たとえば何かについて感じたり考えたり、食事を楽しんだりすることは普遍的な価値であると言える気がします。自然に恵まれた庄内の土地で、修行や新しい人々との交流を通して、改めて日常の様々な小さな幸せを見つけました。「生きること」について考えながら生活したからこそ、滝に打たれて凍えた後に外の空気に触れられた心地よさや、贅沢なお食事の美味しさ、新しい人々と出会うことの楽しさなど、小さな幸せを心から感じたのです。

「生きがい」に関連して、最後に「生命」を人工的に生み出すことを可能にした（しつつある）科学技術について考察します。近年、人のクローン化が倫理的に問題化されている中で、医学的に必要性が認められれば認めて良いと私は思うようになりました。というのも、井奥先生の講演を聞いて、生というのはもともと不平等であると私自身も実感したからです。裕福な家庭で生まれた子もいれば貧乏な家庭で生まれた子もいます。戦争地域で生まれた子もいれば長閑な山奥で生まれた子もいます。そういった前提がある上に、人工授精で生まれてくる子もいる世の中において、もはやどのような環境や境遇で子供が生まれてきたかを問うことはできないでしょう。むしろ、ここで問われるのは、クローンとして生まれた子供が「生きがい」を見つけられないかもしれないという問題です。それを感じさせるには、先程述べたように、普通に人間として「生きること」ができるように、両親または両親に代わる人が配慮してあげることです。普通に1人の人間として愛してあげることです。それができると誓約できる人にこそ、クローンの権利を認めるべきであると私は思います。

このように、今回の庄内セミナーにおいて、庄内という土地で日常的かつ非日常的な体験を通じて「生命」について考えられたと思います。あまり私の考えが変化したわけではないのですが、宗教に代表される様々な生命観を許容し尊重できるようになったのは、私にとって大きな成長です。当初の目的であった「考える」ことを避けがちな問題について考えることも、慶應義塾の交友関係を広げることも、他者と比較して自分を見つめ直すこともできたので、素晴らしい4日間でした。庄内セミナーを企画、運営してくださった方々に感謝したいです。

「生命」を考える

文学研究科（博士課程）２年　佐藤　章

注連寺は心に残る寺であった。作家・森敦が訪れた頃と、その風景はどのくらい変わったのであろうか。あまり変わっていないのではないかとも思った。古ぼけた庫裏や桜の大樹の裏から、ひょいと森敦が現れてきそうな気がしたからである。もちろん、当時よりも交通は整備され、山を少し下れば、山形自動車道というような高速道路も走っている。観光客も多く訪れるのであろう。しかし、注連寺の周囲は静寂に包まれていた。「幽玄」という言葉が頭をよぎった。森敦が描いた別世界が、ここにはまだあると感じた。

森敦の『月山』では、月山は死の山として捉えられている。これは森敦の文学的創作というよりも、月山に祀られる仏が阿弥陀如来であることが示しているように、庄内平野の人々が古くより抱いてきた観念であったと考えられる。人は何故死ぬのであろうか。死んだら人はどこへゆくのであろうか。そういう素朴な疑問が、月山をして死の山とよばせた。死者の霊魂は月山の峰に集まるが、この死の山から流れ出る水は、庄内平野を潤し生命を育んでゆく。生の根源は死であり、この二つは循環するものとして捉えられているのである。

普段、関東平野に暮らしているとなかなか気がつかないが、地図をみてみれば、日本列島が、北から南まで、そのほとんどを山に覆われていることが理解できる。太古の昔より、この列島では山と人が互いに体を擦り合わせるように、深くかかわり合いながら生きてきたのであろう。環境が人をつくるとするならば、山また山に覆われる、この島国に暮らす人々の心身が、山の存在によってどれほど大きな影響を受けてきたのか、容易には計り知れないものがある。山は、日本人の宗教感情を育むうえで大きな意味合いをもったはずである。登山そのものを教義の中心にすえる修験道が発達を遂げたことは、その証左であるといえよう。

山はひとつの生命体である。多くの植物や動物の死を受け入れるが、同時に彼らを育み再生させもする。修験の行者は、険しい山路を登りつつ、自らの肉体を酷使する中で、自分という有限な生命が、山という大きな生命体の中に呑み込まれてゆくことを体感していたのではないだろうか。出羽三山において行われる「秋の峰入り」は、擬死再生儀礼としての形態が忠実に伝承されているという。羽黒修験もまた、独自の生命哲学をもっているのである。秋の峰入りにおいては、行者は俗身を捨て、新しい生命となって生まれ変わるために、山中へと入ってゆく。この儀礼を貫く基本構造は、山が母胎となり、人間がそこで育まれる胎児となるというものである。修験道には、人間と自然の一体化を試みることで、生命の再生を図るという側面があると考えられるのである。

日本の山は、本来聖域であった。そこに足を踏み入れるには、一定期間の精進潔斎を経ることが必要とされていた。こうした宗教的意味合いをもった山に、近代アルピニズムというスポーツとしての登山を行う人たちが登場した。ヨーロッパのアルピニストたちが、個人の意志力と征服欲によって、中世の迷妄に包まれた山々を踏破したように、日本における近代登山の先駆者たちも、合理思想に基づいて、霊山にまつわる信仰に躊躇することなく、次々と日本の山々を登りつめていった。やがて、平地に暮らす人々の生活を意味づけてきた神仏宿る山々は、その神秘性を剥奪され、自然の一情景として対象化されていったのである。

もちろん、近代に入り、山が人々の健康維持のための行楽地として再発見されたことは、人々の生活に新たな安らぎや楽しみを与えることにもなった。しかし、山がモノとして対象化されたことで、人が山に持っていた宗教的な感覚、すなわち、生命体としての山という観念も急速に失われていってしまったといえる。近代人にとって、山は挑戦すべき自然対象物、あるいは利用すべき天然資源と化し、人々の暮らしを豊かにするために、最大限利用されるものとなったのである。スキー場やゴルフ場、ダムやトンネルの建設、あるいは、過度の針葉樹の植栽などのために、日本中の山々の木々が切られ、山肌が削り取られていった。山という別世界（あるいは、別世界としての山のあり方）を喪失したことで、山と人との双方向的な関係も失われた。このことで、平地における人々の生活は、緊張感の希薄なものになってしまったのではないだろうか。山から神秘性が抹消された結果、人々の生命感覚は、根底からゆがめられてしまったといえよう。

第５回庄内セミナーでは、生は死によって裏打ちされるという観念が息づく出羽三山の山懐で、「生命」について考え、討論を重ねてきた。出羽三山は、未だ山本来の神秘感を深く宿している場所であるように感じられた。「生命」という主題は、この場所であったからこそ、深く、また鋭い感性で捉えられるものであったように思われる。

生命を考える

経済学部２年　周　彦甲

個人の生命観というのは簡単に変わるものではありません。その人がそれまで歩んできた人生、環境その他諸々が絡み合い形成されるものです。もちろん私も例外ではなく、これまでの19年間培ってきた経験等をもとに独自のものを内面に作り上げてきました。結論からいうと、3泊4日の庄内セミナーを通して私の生命観の根幹部分は変化しませんでした。しかし、自分の知らなかった世界、見方があるということを明確に知ることができるようになった素晴らしい体験でした。

「生」に情熱をかたむけることが「生きること」であると私は考えています。なにかの目的のために精一杯努力することや目標に向かって頑張ることが人生を豊かにし、その人の「生きること」を美しく飾るのです。また「生」を考えるうえでもう一つの転換点となるのは「死」に触れることでもあります。身近な人の死や自身の余命を知ることも「生きること」を追及する理由にもなります。このように情熱的に「生」を謳歌する人々こそが人間たらしめるものであると思っていました。しかし、セミナーを通し、私の生命観にまた別のアプローチが存在することを私は知ったのです。

庄内セミナーでははじめに班を構成し、そのメンバーのそれぞれの生命観について話し合いました。生きること自体が生命活動を意識的に維持し、喜怒哀楽をもって日々を送ることであるという意見や、自身と他人を支える手段が「生きること」である、また東日本大震災で感じた死の恐怖から「生きること」を深く意識するようになったなどさまざまな考えに触れることができました。なかでも、死んだ当人は死んだことが分からないため生も死もないという観点から「生きること」をあえて定義しない、という意見には驚かされました。当然普段の大学生活の中で生命観について議論することなどないため、とても新鮮なものを味わえたと同時に、改めて生きることについて向き合ってみようと私自身思うようになりました。

即身仏の拝観や論語素読といった未知の体験をしましたが、やはり一番印象に残ったのは修験体験です。白装束を身にまとい修業した経験はとてつもなく貴重なものでした。滝打ちでははじめ、冷たい水に若干抵抗したものの、禅を組み心落ち着かせることでまったく冷たさも感じなくなり、「無」という感覚をつかめた気がしました。滝に打たれている間、不思議なのは本当になにも感じなくなることです。煩悩を洗い流すということでしたが自分は流れるイメージよりも、虚無とは違った「無」を感じました。死が無になることという表現をよく聞きますが、これに近い感覚なのでしょうか。山道を歩いているときも不思議な感覚を感じました。説明できないような自然な力があり、自然と一つになるといったような、抽象的ですが、そういった力を感じました。鈴木正崇先生の羽黒修験講義でも以下のようにありました。

> 修験は自然を神や仏や菩薩そのもの、あるいは顕現とし、その中に分け入って一体となる。仏教的に表現すれば、その身そのままで仏になる即身成仏であるが、実際には大自然の生命に触れ、共に生命を共有する感覚や体験を通じて、身体に新たな力を宿す。言い換えれば、人間も自然も共に生命を持つことに気づき、大自然そのものと自己が二つで一つの世界になることが修験の極意であった。
>
> （鈴木正崇『羽黒修験』８月30日の講義レジュメp1）

このように修験は自然と一体になる修行であり、私が感じたものは正しかったように思われます。この他瞑想や南蛮いぶしを行ったあとに火を飛び越える出生式を終え、修験体験は終了しました。一通りやり切った身としてはなにか不思議な感覚を実感したことと、娑婆に戻ったらどのように感じるのかといった期待がありました。別段大きな変化などありませんでしたが。

このセミナーを通して得た新たなアプローチは、自然から「生きること」を見てみるということです。古来より人は自然とともに宗教や文化を育みながら生活していました。人々と自然は密接に関わってきたわけです。そういった自然に対する信仰が文化や宗教を作り、「生きること」や「死ぬこと」について考えることにつながったのだと思います。

「母体回帰」などの死と再生の思想を自然からくみ取ること自体、山や森といった自然に母を感じたからなのでしょうか。

人は情熱をもって「生」に向き合うことが「生きること」であり、その情熱がその人自身の「生」を美しく磨きます。「死」と向き合うことも必要です。またそれと同じく、母なる自然を感じ、自然に感謝することも「生きること」につながるのではないでしょうか。生命を育む自然、人の文化や生活を発展させてきた自然といった前提があるからこそ私たちは「生きること」について哲学することができるのです。

人それぞれ独自の生命観を持っています。私が活動したセミナーグループの２班においても、6人とも別々の個性的な生命観を持っていました。しかし、大事なのは「生きること」について議論する際に人だけでなく、自然をも対象にしなければならないことです。それはセミナーを通して実感したことであり、私にとっての一番の収穫です。

〈参考文献〉

内藤正敏『民族の発見Ⅱ　鬼と修験のフォークロア』、東京：法政大学出版局、2007年。

「自由である」という生命の目的

経済学部４年　高井 宏輔

「人生なんて死ぬまでの暇つぶし」。自分の生きている意味。誰のため、何のために生きていくか。死について。二十数年生きる中で悩み悩んだ末に辿り着いた私なりの「自由な人生」を送るための楽観的な心構えだ。うまくいかないことも暇つぶしだからといって、自分の中で割り切るようにしてきた。それを繰り返すことで「なりたい理想の自分」から徐々に遠ざかっていった。そしていつしか今の自分を肯定することができなくなってしまった。そのせいか、日常のしがらみや過去を洗い流して気持ちを一新したいという願望が無意識のうちにあったのかもしれない。羽黒修験において、修行者は儀礼の上で一度死ぬことを求められ、無の境地で山中に入る。地獄の六道になぞらえた苦行をくぐり抜け、自然を母胎として生まれ変わりを果たすという。山伏修行体験をしたセミナーからひと月、私は自分が生まれ変わったかどうか分からない。ただ、庄内の広大な自然に触れたり、馴染みのない生命観・死生観について触れたりすることで自分と向き合い見つめ直すことができたのは確かだ。

山伏修行体験を経た私の煩悩に関する考察

生命について考えるときに私がまず思い浮かべたのは自身の少年時代の残虐な遊びだ。小学生の夏休み、毎日のように公園に出かけては蝉を捕まえては遊び半分で殺していた。昆虫は簡単に死んでしまう。なぜか分からないが、自由奔放な当時はそれが楽しくてしょうがなかった。自分が残酷なことをしているといつ自覚したのだろうか、子供なりに命の儚さを学んでいく過程だったのかもしれない。

セミナー初日の井奥先生の講義によると生命には大きく二つの目的があるということだった。それは個体を維持する「代謝」と種を維持する「自己複製」である。それに加えて私は「自由であること」も生命の目的の一つであると上記の経験から考えたい。遺伝子が自己を複製したい、私たち個体が子孫を残したいという行動はたくさん見受けられるが、実はそうではない生命の時間の方が大半を占める。残虐な幼少期の自由な振る舞いにも見られるように、そうした時間はできるだけ楽をしよう、できるだけ楽しもうということに注力される。これは仏教でいうところの煩悩に当たるのではないか。では、私たちは自由という生命の目的を達成するために、煩悩とどう向き合っていけばよいのだろう。山伏修行体験を振り返ることで考察する。

修験道は煩悩を捨て去る修行であり、今回は滝行や山歩き、座禅、南蛮燻、火渡りで「擬死体験」の一部を体験させていただいた。結論からいうと私は煩悩を捨て去ることができたのかどうか分からない。滝行では、山中のコンクリートの壁の前に胡坐をかき、背中を壁に預けて上から落ちてくる水に耐えた。８月ではあるが水は思わず声を上げたくなるほど冷たく、隣の参加者と触れ合う足の温もりや、水に叩かれた部分が熱を帯びるのを感じた。冷たい、なぜこんなことをしているのだろうと思考を巡らせるうちに、何も考えないことが一番楽だということに気付いた。また南蛮燻では、唐辛子をはじめとする香辛料を七輪で燻した密室に身を置き息苦しい中の呼吸に耐えた。御経を上げる先達の方がまず咽せはじめ、それが徐々に全体へ伝染していった。私は喉に空気を入れると咳き込んでしまうであろうと考えて口呼吸を一切せず、徹底して鼻呼吸をした。その甲斐あってか確かに苦しかったがなんとか耐え忍ぶことができた。

ここでは滝行と南蛮燻に触れたが、いずれの修行においても私は「どうすれば楽にやり過ごせるか」を常に頭の中で考えていたことがわかる。確かに滝に打たれたり煙にいぶされたりしている最中は、思考停止状態で煩悩が消え去っていたのかもしれない。しかしそれは私が楽をしようとした結果なのだ。煩悩は自分の力だけで意識的になくすことは不可能ではあるが、修行という特殊な状況下で煩悩を突き詰めれば捨て去れるものだと考えられる。

では煩悩は追求し続ければ捨て去ることができるのだろうか。先の例での「楽をしたい」という煩悩を仮に「負の煩悩」とすれば、翻って「楽しもう」という「正の煩悩」にも目を向けなければならない。正の煩悩について考えると、それに際限がなく捨て去れないと私は考える。どんな煩悩でも達成されるという前提であれば話は別だが、煩悩は達成できないからこそ苦しみ、求め続けるものなのではないか。その意味では人間が煩悩を追求するのは必然であり、あらゆる煩悩が達成されることは決して起こりえないからだ。その一方で冒頭の幼少期のように「昆虫を殺したい」という煩悩に捉われていたが、それを人間的な倫理観に反するのだと学び、反省することもできる。これはあくまで一例に過ぎないが、人は行き過ぎた煩悩を悔い改め、反省することもできるのだ。

以上を整理すると、人間の煩悩に際限はなく欲し続けるものだが、学び反省を繰り返すことでコントロールすることができる。そうすることで、真の意味で「自由であること」という生命の目的も達成することができるのではないか。以上をもって私の煩悩に関する考察とする。

文化人類学は全くの門外漢である私が庄内セミナーに参加したのは「修行楽しそう！」という興味本位がきっかけでした。死について考えた際、今回体験したことを生かして人

生という暇つぶしを充実したものにしていきたいと思います。末筆にはなりますが、このような機会を設けてくださった先生方をはじめ、庄内セミナーに関わったすべてのみなさまに感謝を申し上げます。ありがとうございました！

庄内で感じた「つながり」

法学部（政治）４年　髙林 一樹

「生きること」を考える。この事前課題のテーマに、私は非常に苦戦したことを覚えている。「生きること」を当然のことと考えていたため、その「当たり前」を問い直すことに想像以上の労力を要したのだ。そんな私が自分自身の経験や実感から、庄内セミナー以前に考えた「生きること」とは「感じること」であった。それは人間の「体感」「感動」「感謝」を生の核と考えたもので、私はこの庄内セミナーでも多くの体験、感動、感謝をした。しかし、私がこの庄内セミナーを通じて最も強く「感じ」たのは、生きる上での「つながり」であった。以下、この事後課題では、四日間の内で特に印象に残った体験を基に、私の感じた「つながり」と生命観について紹介させていただこうと思う。

とは言ったものの、庄内セミナーの初めから「つながり」を感じていたわけでは全くない。むしろ、鶴岡という初めての地で、初対面の人々と交流するということに、不安や孤独さえ感じていた。そんな私が「つながり」を意識し始めるきっかけとなったのは、二日目の注連寺見学でのことであった。注連寺。かつて女人のための湯殿山参詣所として大いに賑わったというこの寺は、往時の賑わいなど想像できないほどひっそりと山の中に建っていた。しかしたしかに、人々の信仰の積み重なりを不思議と感じられる、そんな古刹である。この注連寺では、庄内セミナーでの興味深い経験の一つと考えていた即身仏拝観をすることができた。だが、私が受けたのは当初の期待とは随分違った印象である。私は、即身仏となられた鉄門海上人から功徳を感じるどころか、失礼ながら、漆でどうにか形を保っているそのお姿から、作り物を見ているかのような印象を受けてしまったのである。しかし、住職はこの即身仏はまだ「生きている」とおっしゃった。この発言は私にとってとても衝撃的であった。というのも、この即身仏が「生きている」のであれば、「生きる」上で「感じる」という要素は重要ではなくなり、「生きている」という状態は非常に観念的なものになるからである。そして住職はまた、生きていく上で「次につないでいく」ことが大切なのだともおっしゃった。この発言をきっかけとして、私は「生きること」と「つながること」を意識し始める。「つながり」を生の本質と捉えるのであれば、たしかに鉄門海上人は即身仏という形で現代人の心となお「つながり」、見る人それぞれに意義ある問いかけをし続けてくださっているという点で、今もなお「生きている」のかもしれない。午後に訪れた松ヶ岡開墾場や致道館においても、地元の人々に受け継がれ、大切に守られている庄内藩士達の魂は、たしかに現代へと「つながり」、人々の心の中で脈々と「生きている」かのように感じられた。

そして三日目、待ちに待った山伏体験にて、私は大いなる「つながり」を実感した。白装束に身を包んだ私達は、まず滝打ちを行った。しかしこの滝打ちが、想像を遥かに超える苦行であった。とにかく水が冷たいのだ。じっと無心となって耐えようとしたが、体は震えが止まらず、頭の中には寒いという言葉が回り続ける。しかし、不思議なことに、段々と寒さは和らいでいった。ただ寒さに慣れただけでなく、体の内から湧き上がってくる熱を、まるで生命力のようなものを感じ、大げさながら人間の持つエネルギーを感じることができた。しかし、エネルギーを持っているのは人間だけではなかった。次の羽黒山登頂で感じたのは圧倒的な自然のエネルギーである。大いなる杉並木の中、無言で一列になり登って行く私達はまさに赤子同然で、人間は自然に抱かれて生きているのだという感覚を強烈に刻み付けられた。だが、単に自然を圧倒視したというわけではない。山中にそびえる堂宇や国宝の五重塔からは、自然と上手く折り合いをつけ、共存する人間の力強さをも垣間見た気がした。これは、私には人間と自然との「つながり」と感じられた。実際に滝に打たれ、山を歩くこの山伏体験を通じて、私自身もまた少なからず自然と「つながり」、一体となれた気がする。

そして、このセミナーを通じて最も強く感じた「つながり」は、人と人との「つながり」であった。もともと見ず知らずの関係であった人同士が、議論をし、寝食を共にし、三日目の夜には酒を片手に皆で星空を眺めて談笑している。その時間がいかに楽しく感じられたことか。このセミナーに関係する方々全員との「つながり」のおかげで、庄内セミナーの四日間の私の「生」は、非常に実り多いものとなったのである。日常生活では周囲の友人や家族と「つながっている」ことが当然であった。初上陸の地で初対面の人々と共に生活するというこのセミナーだからこそ、周囲の人と「つながっている」

ことの有り難さを実感できたと思う。

長くなってしまったが、上記において、私が庄内セミナーにて感じた「自然とのつながり」と「人とのつながり」を紹介させてもらった。人は「つながり」なしには生きることができない。その意味で、私は庄内セミナーを経て、「生きること」とは「つながること」であると考えるに至った。だからこそ、私達は何気ない一期一会の「つながり」に積極的に関与していき、そして更には昨日の自分から明日の自分へと「つながって」、山伏風に言うのであれば生まれ変わっていく、これこそが生きる上で大切なことなのではないだろうか。

それでは最後に、このセミナーをつくり上げてくださった教養研究センターの先生方、鶴岡市の皆様方、関係してくださった全ての方々に心からお礼を申し上げ、締め括りとさせていただきたいと存じます。大変貴重な学びの機会をご提供いただき、本当にありがとうございました。

「生命」について

経済学部２年　谷　昭仁

初日「生命」についてのマインドマップを作成した。その時まず浮かんだ言葉は、「生」と正反対にある「死」であった。生きるのは死ぬための準備であり、生物は死んだ後は「無」となって何も残らないだろうと考えていた。セミナーの最終日も同じように「生命」を中心としたマインドマップを作成した。その時まず浮かんだ言葉は「生」であった。私の心なかで何か変化が起こったと思う。この点をセミナーで学んだこと・感じたことに沿って報告したい。

私の死生観に影響を与えたことについて記したい。まず、私は人が死ぬと何も残らず、「無」になると考えていた。井奥教授のお話では、科学的にそれをとらえなおすことができた。人間は60兆個の細胞から成り立ち、それらが相互補完的に活動し人間を作っているということであった。それが死んだ後、細胞はバクテリアにより分解されバラバラになり、分子レベルとなって自然に再び還るということであった。私はこの話に妙に納得してしまった。それは即身仏の見学を行ったことが要因だと思う。注連寺の鉄門海上人は18世紀後半に誕生したが、まだ死んではないとされる。即身仏として肉体は現存しているためまだ生きているとされ、葬式は行われていないのだ。12年に一度地域住民により、鉄門海上人の法衣替えが行われている。私は死というものは肉体と魂が分離して魂がなくなるものだと考えていたが、鉄門海上人は神様として肉体だけを残しここに現存している。生命が死んでも、魂のような形而上学的な思想でなく、分子レベルだけでなく即身仏のように肉体としても生きた痕跡を残せるということを実感した。

即身仏となった鉄門海上人は、死後にミイラになるのとは違い、死を前提とした厳しい修行を行った。生きていながら、土中入定して、五穀を断ち、十穀を断つという厳しい修行の上で衆生救済を祈願していた。では、そのような祈りをしながら自ら命を絶つという行為は正当化されるのだろうか。なかなか答えがすぐに出る問題ではないが死ぬことについて深く考える機会であった。

生命とは何であるのだろうか。井奥教授によると、1つめは「個体」を維持すること、すなわち体外から生きていくのに必要なものを摂取し新たに構成して代謝していく能力をもつということである。2つめは「種」を保存すること、すなわち自己複製して子孫を作るということである。ここで強く感じた点は、生命は子孫を残すことを縦軸とするなら、日ごろの生活は横軸としてでも生きていかなければならないということだ。横軸で生きるなら、自分以外のものを摂取して、それを自分のものとして生かしていかなければならない。単体で生きていくのは不可能で、他者の存在が必要になり、仲間を作るものが生き続けていくのだ。生命は個体単体では生きていけないと感じた。

このセミナーが行われる一週間前、広島で大規模土砂災害が発生した。私の実家の近くで、知人も被災したこともあって「死」について考える機会があった。知っている土地で多くの方が亡くなるというのはショックであり、そのような気持ちを初めて実感した。恐ろしい力をもつ山をなぜ信仰して、修行しているのか、私は悶々と考えていた。セミナー3日目、私たちはミニ山伏を体験した。鈴木教授によれば、実際は7日に及ぶ修行になる。興味深い点は、まず自分たちの葬式から始めるのだ。そうして、最終日に山を母体ととらえ、参道を産道とみなし山を駆け下りることで生き返るという儀式を行うため、修験道は擬死胎生の修行であるとされる。この修行は毎年行われ、修行者たちが山の権現に触れている。私たちは、その修験道の修行の一部である滝行を体験した。滝に打たれる中でいろいろなものが流される感じがした。頭と肩に滝から落ちてくる冷たい水があたり、それが体に触れながら流れていく。修行を続ければ、滝の流れを邪魔をすることなく滝行を行うことができるようになるとお話を聞いた。私はまだそのような境地に至ってはないが、本当に一瞬であるが自然と一体化したような体験することができ、自然の中で自分は生きているなと実感できた。滝行が終わったとき、多くの友人に「顔が変わったね」「いい顔しているね」と言われた。言葉でうまく言い表すことはできな

いが、滝に打たれて自分の悪いところが流された感じがした。スッキリした気分になったという方が正確かもしれない。このような感覚を体得するために修行していくのだろう。ミニ修行後の鈴木教授のお話によると、「自然の中に生命を感じる。死んでも何か残る。人間も自然の一部であると実感して、人間自然宇宙が連関する世界を感じる。何か根源的なものがある場、それが山。」ということであった。生命を感じることができる山だからこそ私たちは憑りつかれていくと感じた。

はじめは軽い気持ちで参加した庄内セミナーであったが、日ごろの生活ではなかなか考える機会のない「生命」についてセミナーの参加者と議論し体験するという貴重な体験をさせていただいた。関係者の皆様にお礼申し上げるとともに、今後も「生命」「死」について考えを深めていきたいと思う。

「生命」を考える

文学部１年　谷藤 瑞咲

現在、2014年9月30日午前3時9分である。このレポートの締切りは本日中である。私は今、時間に追われている。それは確かだ。それでは、時間に追われる、という表現を見つめなおすことから「生きること」を考えたい。「時間に追われる」とは忙しい、時間の少なさを嘆く、余裕がない、などと同じ意味である。忙しかったり、時間の少なさを嘆いたり、余裕がないと感じるのは人間で、あくまでも人間の一人よがりの言葉に思える。しかし、「時間に追われる」という表現はまるで時間というものに足が生えて人間の後ろから走って追いかけてきているような印象を与える言葉である。時に聖母のようにほほえみながら、そして時には殺人鬼のように鋭く怪しい目つきをして。そんな様子を思い描くと、幼いころに祖母に枕元で読んでもらった数えきれないほどの幻想世界を描いた絵本を想う。

私の両親は共働きで仕事が忙しかった。そのため、私が生まれると両親は祖父母の家のすぐ近くに引っ越し、毎日私を祖父母に預けた。私は小学校に上がるまでほとんどの時間を祖父母と過ごした。昼食が終わると祖母は私に昼寝をさせようとしたが、私はちっとも眠くなかったために「本を読んで」とせがんだ。一冊では物足りず、何冊も読んでもらった。そのうち、祖母が疲れて私を置いて家事をしだすと私は自分で本を手に取って、何冊も何度も読んだ。明かりを暗くした畳の部屋で薄い毛布にくるまって読む絵本は私に時間を忘れさせた。少し長すぎる犬の胴体もこぼれそうなミルクも、真っ黒の山に咲く真っ赤や真っ青の花も大きなひらがなもすべてが私を魅了した。天井の大きな木目は泣いている人の顔のように見えたので、いつもは見ないようにしていたが、仰向けで本を読んでいる時には私は自分から進んでその木目を怒らせたり、微笑ませたり、父親と重ねたりして幻想の世界に引きずり込んだ。妄想と本の世界はどこまでも自由で広がっていった。しかし、それは同時にどこまでも冷酷だった。いつも、気が付くと部屋も家の外も夕日に赤く染まって夜が始まろうとしていた。天井の大きな木目も泣いている人の顔に戻っていた。時間が経つことを全く忘れていたからこそ、私が知らぬ間に夜が始まろうとしているのがとても怖かった。

すべての人間に平等に与えられているものは、時間と死だと私は考える。あの幼い妄想と本の日々とこのレポートに追われている今日も私に与えられている時間は全く同じである。そして、あの日々も今日も私に死が与えられていることも全く同じである。思えば、私はあの妄想と本の時代以降、「時間に追われて」生きているのかもしれない。私はあの頃以来、時間を忘れてどっぷりと幻想の城にたてこもった日は一日たりとも無いかもしれない、と思っていた。そしていつか、私の後ろから追いかけてくる足の生えた時間に殺人鬼に殺されるように残虐に命をとられるか、聖母のように優しく後ろから抱きしめられて息絶えるのだろう、と思っていた。庄内に行くまでは。

庄内ではたくさんの経験をした。特に修験の体験は普段滅多にできないことだった。大勢で白装束を着て、山を歩く経験は私に時間を忘れさせた。山を歩いている時、私は歩いているという意識がほとんど無かった。何か大きな力に動かされて足が勝手に一歩一歩踏み出しているようだった。そして、庄内の山を全身に感じながら幻想の城を作り出した。幼いころは絵本と天井の木目を見て妄想して作り上げていた幻想の城を庄内の山の中で空気を感じて作り上げるのは快感だった。私の今までの短い人生、これから生きていかなければならないであろう人生、死後の世界、生まれる前の世界にひたすら考えを巡らせ、絶対的な女王様に成り上がったように、体が感じたままに山を幻想の世界に引きずり込んで征服してやった。そして、時が経つのも忘れて、つまり私を追いかけてくる足の生えた時間の存在を忘れて、ひたすら生と死を妄想した。

庄内セミナーは私に貴重なひと時を与えてくれた。普段は時間に追われて何となく毎日を過ごしているため、自分をみつめる機会はあまり無い。私は18歳。いつか死が待ち受けることは確かだ。しかし、今、若く美しくあるうちにこうして時を忘れ、幼い日々にかえったように幻想と妄想の城を作り上げ、自然を感じて生と死を見つめられたことを本当にうれしく思う。時間と死が全ての人間に平等に与えられるなか、時を忘れて自分を見つめることが生を実感することにつながるだろうと私は考える。

体験と変化

文学部３年　東野 隆弘

能除一切苦 真実不虚
能除一切苦 真実不虚
能除一切苦 真実不虚

出羽三山を開山した能除大師の名は般若心経に由来するという。簡潔に、仏教の哲学と陀羅尼がまとめられているお経であり、日本で最も普及していると言って過言ではないだろう。空海もまた、この経について『般若心経秘鍵』というものを書き、般若心経のなかに諸々の悟りの説明と諸々の悟りの真言が入っていると看破した。おそらく、作られた年代的に考えて、そんなことはないだろう。むしろ、空海がその中で批判している大般若経を要約したものというのが般若心経の適切な説明であろう。ただし、空海はある意味の誤解によって後世にまで残る新たな般若心経を残したのである。

羽黒修験においても、おそらくは仏教側から見ても神道側から見ても、間違ったことだらけであろう。しかしその世界の中ではしっかりと一つの世界が矛盾なく回っているのである。もしかしたら矛盾があっても回っているかもしれない。論理や文字によって作られた世界が経験や現実によって再解釈されたというべきなのであろうか。世界と世界は同時に衝突して食べあって変化しあっているのである。

論理はこねたので、こちらも現実のことに戻って行くことにする。私にとって庄内セミナーは夏休みの東北旅行の一環であった。セミナー当日に着いた早朝、電車で酒田まで行き、最上川の河口を眺めながらかねてから鈴木先生に勧められていた海向寺に参った。ここには二体の即身仏があり、実はここで満足して帰ってもいいかと思った。次に見た酒田の海もよく、ここから故郷の上方の方へ船が繋がっていたかと思うと感慨深くやはり満足して帰ってもいいかと思ったのだ。セミナーの中のことは面白かったことだけ抜粋して書くことにする。修験道体験の前の夜に、よく分からないが大きい犬だか熊だかゴリラだか分からない生物を見たのと、こっそり修験道体験の日が誕生日だったのと、荒沢寺の不動明王があるところにかつては千年続く火があったことを直接鈴木先生に聞いたのは面白かった。色々な偶然に人は出会えるようである。

なお、セミナー終了後は、車で迎えにきてくれた友人と共に湯殿山へ向かった。昼食時は雨であったが、二人が合流したあとは清々しい晴れとなり、まさに大日如来のお導きというべきであったか、晴れ渡る空の元を湯殿山へ登ったのである。湯殿の詳細は芭蕉と同じく伏せ、袂を濡らすに留めておく。次の日は立石寺に登り、そのまた次の日は塩竈神社を尋ねた。塩竈神社を拝んだあと、しばらく境内の椅子で休んでいたところ、ふと思い出し、カバンから奥の細道を取りいだし、仙台から酒田までを読んだ。二年前に来た平泉などと合わせ、ちょうどそこまでを逆向きに回り切ったことに気づき、改めてこのたびの有難さを思った。羽黒の章は鮮烈であり、観音の月と寺の炎が相照らしあっているのを瞼に浮かべ、その有難さに能除大師の有難さを思い、般若心経を詠むことにした。能除一切苦真実不虚。面白いもので、裏の鳥居から出る際に、品の良い老人から話しかけられ、塩竈神社のご祭神、塩竈神社の御利益、先の震災で松島で死人が出なかったことなどを教えていただく。今思えばボランティアの方か、郷土史家の方だったのであろうか。ともかく不思議な出会いである。これもまた般若心経が作った縁である。そのあとは普通に仙台空港へ向かい、大阪の方へ帰った。流石に不思議なことが多かったのでカレーうどんを途中で食べた。特殊なことがあり過ぎると普通にしたくなるものである。東北旅行は以上である。不思議かな。不可思議かな。

さて、翻って生命観、死生観であるが、残念ながら今の自分では語ることが出来ない。時間が足りないとか言葉が出ないのではなく概念化するまでに体験に思考がついて行ってないのである。もしこれが東北に行く前までなら喜々として魂魄なり身体性なり五蘊についてなり語っていただろうが、今は語る気も起きないし、語っても意味がないだろうと思うのである。それほどに偶然の重なりは私の根底を揺るがしている。華厳経や老子を引けば言えるかもしれないが、それはやはり分離した言葉である。ならば私はどうすれば良いのか。それは知識を蓄えることではあるまい。能除一切苦の五文字は般若心経の中で最も切実な人々の一言である。世界を変えるのでも国家を鎮護するのでもなくただ人の苦を除く。小さな、人一人への奇跡である。しかしその小さな奇跡の積み重ねの上に能除大師は立っている。言葉にするには、降りるのが手っ取り早いだろう。しかし、山は登ればいつか下る。そこを越えていきたいと今は思っている。日常が非日常を取り込み、非日常が日常を取り込む。毎日の生活の中でもそれは行われているのだろう。だったら、それはそれで面白いのではないか。日常か非日常か、面白いかそうでないか、何かか何かでないか決めるのは、ひとえに私の心一つである。そういう自由な世界に生きている。だからそれでいいんじゃないか。今は生きることに努め、今を越えて行こうと、山の東北でも故郷の上方でもない坂東の朝の元にそう思った。『般若心経秘鍵』と「般若心経」からそれぞれ抜き出し最後に今思っている単語を合わせ、この課題の、庄内セミナーの、そして私の心の旅の一区切りにしたいと思う。

文殊の利剣は諸戯を絶つ
覚母の梵文は調御の師なり
チクマンの真言を種子とす
諸教を含蔵せる陀羅尼なり

能除一切苦真実不虚
羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦

菩提薩婆訶 般若心経

心の座 心の座 心の座
翼無くして虚空を駆けん
最後の句、未だ定まらず
（締めの句が考えられるようになれば、また一つ私は歩を進むであろう）

「生命」を考える

法学部（政治）４年　野町 美帆

庄内セミナーは自身の生命観を大きく変動させるものだった。参加以前、自身にとって生きるとは「歴史を作っていくこと」であり、個々の生命は短く儚いものだという諦念があった。しかしながらセミナーを経て、講義や参加者との対話、修験体験を通じて感じたのは個々の生命の力強さだった。地球の寿命や歴史の長さからすれば人の一生はほんのわずかなものに過ぎない。しかしながらその短い一生を自然と共に精一杯生きようとする命の強さを感じることとなった。具体的なエピソードとして三つを紹介したいと思う。

第一に、二日目に注連寺にて即身仏を拝観したことである。江戸時代に生きていたその人は、皮膚を漆で固められ、やせ細りながらも確かに人間の姿をしていた。即身仏になるための工程は非常に厳しく、失敗して腐敗してしまう場合も多々あったという。数百年も前に生きた人間が即身仏となり今の世にも在り続けているということは、非常に衝撃だった。ただ一人の個人が数百年後の世界に生きる私たちにこれほどの影響を与えているという、その生命の力強さに思うところがあった。

第二に、鶴岡の自然や食との出会いである。今回の宿泊場所は市内から離れた羽黒山の山奥にあり、電波も通じないような場所だった。真夜中に外に出ると街灯は無く、迷子になればもう戻ってこられないのではというほどの暗闇だった。同時に晴れた夜には、都会ではお目にかかれないほどの満天の星を見ることが出来た。更に、食を通じても鶴岡の自然に触れることが出来た。セミナー中は米やだだ茶豆をはじめ、庄内の名産品を多く食すことが出来た。庄内の自然の中で育てられた食物を食べながら、「食べることは食物を通して自然のエネルギーを得ること」なのだと実感した。

そして第三に、何よりも修験体験から得たもの、感じ取ったものが大きかった。修験体験は滝行、羽黒山踏破、南蛮燻などを行い「擬死再生」を体験するというわずか一日だけのものだったが、全てを終えたときに実際に「生まれ変わり」を実感することが出来た。滝行では初めに水に入った際、あまりの冷たさに足すら浸かっていられなかったが、滝の下に座り込み体の中央にエネルギーを集める想像をして耐えていると、次第に冷たさを感じなくなった。それどころか水が当たっているところが温かく感じられるようになった。生物学的な現象だと思うのだが、まるで自身を拒絶していた滝（自然）に突然受け入れられたかのような感覚だった。その後金剛杖をつきながら羽黒山の階段を上り下りし、踏破した。階段が作られているとはいえ山の斜面は厳しく、自然の険しさを感じた。修験の白装束を着て約三十名が一列になって歩く様子は壮観らしく、知らない方々に挨拶をされたり写真を撮られることも多かった。修験を始めて一日も経っていないにもかかわらず、そのような扱いをされることに対して躊躇いを感じることは無かった。むしろ、修験中の身として人々に扱われることを積極的に受け入れている自身がいて、非常に不思議な気分であった。床固め、南蛮燻を終え、最後に火渡りを行って「生まれ変わり」をしたあと、不思議と五感が研ぎ澄まされているような感覚になった。目に入る自然の光景が全て新鮮で愛おしいもののように感じられた。このように修験体験では自然の力強さを感じつつ、それと身体を交流させることが出来、生きるとは本来このように精いっぱいに生きることなのだと感じることが出来た。

修験を通して生命を感覚的に感じた一方で、セミナーでは生命を学問的に考える機会もあった。再生医療の第一人者である井奥洪二教授の講義では、生命をバイオテクノロジーの観点から分かりやすくご説明頂いた。現代では遺伝情報さえあれば死者のクローンを作ることさえ出来るというのは非常に衝撃的だった。医療の進歩は人間の生活のために非常に大きな貢献をしてきたことは間違いないが、井奥氏の言葉を借りれば、それらは今や「常識や倫理を覆すところまで行っている」のだ。法整備や倫理観が欠けた中でクローンが作られれば、倫理観の崩壊した世界になることは想像に難くない。

鶴岡での四日間は生命の力強さというものを実感させられ

る体験だった。そしてそれは鶴岡の豊かな自然の中だからこそ経験できたものだった。科学技術が進歩する中でも、私たちはこの生命の力と自然との共生を忘れずに生きていく必要があるのではないか。

本セミナーを通じて生命観を変化させるような体験をしたこと、医療や化学など自身の持たなかった視点から生命について考えることが出来たことは非常に大きな経験となった。

「生命」を考える

経済学部３年　濱崎 和久

私がこの庄内セミナーを通じて感じたのは、「繋がり」です。「生きるということ」と「繋がり」には密接な関係があると思いました。

私が庄内に着いて初めて見学したのは即身仏でした。自らの死を以て社会の平安を願うという即身仏の思想には、自身の生だけで完結しない、開かれた生の有り様が現れていると思います。自身の生にばかり目を向けていると、自身の生が全ての終わりのような気すらしてしまい、死が不必要に恐ろしいもののように感じてしまいます。しかし、自身の死が周囲の人たちの生へと繋がっていくと考えることで、自分の生が大いなる流れの一部と捉えられ、安らげるように思えます。

開墾地や市街地見学をする中で、地域に根ざした生き方が素晴らしいと思いました。現地で蚕業を始めて成功した開墾地、地元の武士の子息の教育に力を入れた致道館を巡る中で、都会にはない、地域の魅力のようなものを感じました。やはり人間は地面に拠って立つ存在であるから、住む土地を蔑ろにした生活は元来不自然なのだと私は考えます。昨今の世の中は、核家族化などで誰もが心のどこかに孤独感を抱えて生きていると言われます。近年深刻化する自殺や孤独死を減らすためには、そういった地域の力を再評価していくことも必要なのではないでしょうか。

山伏体験では普段縁遠い、宗教色の強い体験をしました。今の日本は無宗教国と言われているほど宗教色の薄い国です。多種多様な宗教由来の年間行事としてこなしながら、宗教を問われると無宗教と回答する国民性は、なかなか特殊です。そうなった理由の一つにオウム真理教などのカルト宗教への恐れもあるのでしょうが、本来宗教とは日本人が思っているよりはるかに無害なものなのです。人は死などのある種自分にはどうしようもない現象でも思い悩んでしまいがちです。そうした個人の手に余る物事に指針を与えうるのが宗教なのではないかと私は思っています。

山伏体験は今回のセミナーでも特に印象に深いです。実際に体験したという点も非常に大きいですが、やはり宗教の観点からの死生観が興味深かったです。擬死体験から母胎回帰そして再誕と、仏教特有の輪廻思想が色濃く反映されていると共に、山伏本来の山岳信仰などが混じり合い、独自の文化として昇華していました。さらに驚くべきはそれが永い時に渡って確実に受け継がれてきたことである。先達から代々受け継がれてきたそれらは文化的遺伝子、ミームとも言え、まさに繋がりの結晶です。さらには山伏の修行は麓の人々の協力なくして難しかったことからも、山伏の修行が麓の人々との生活にも馴染んでいるという事が驚きでした。

このように、今回の庄内セミナーでの活動を通して、「生きるということ」と「繋がり」には結びつきがあると感じました。そして、これは「生きる」ということに限らず、この庄内セミナー全体の根底を流れていたテーマだったのではないかと考えています。

まず、私たちは最初、ほとんどの場合、見知らぬ他人同士でした。わずか４日の交流ではありましたが、かけがえのない絆が生まれたと思います。加えて、私は今まで山形に行ったこともなければ、山形のこともよく知りませんでした。そんな私でも歓迎して下さる山形の人たちと触れ合う内に、山形に愛着を感じるようになりました。

そういった機会を与えてくださった関係者への感謝を忘れずに、今回の経験から学んだ事を今回限りで終わりにすることなく、今後の人生に繋げていければと思います。

「生命」を考える
――庄内セミナーを通じて

経済学部４年　降旗 隼平

今回の庄内セミナーでは３泊４日と短い期間でありながら、テーマとなる「生命」について、様々な視点から考えさせられる機会を多く頂くことができた。そうした機会を通じて得られたものや、自分自身の中で変化のあったことについて述べていきたいと思う。

私はセミナーに参加する前まで、「生命」とそれに関わる「生と死」について、どちらかと言えば「死」という観点から「生命」や「生きる」ということを考えていた。具体的には死という存在があるからこそ、生命や生を実感できるし、その価値は高まり魅力的なものに見えるが、科学が発達する中で死に直に触れる機会はほとんどなくなり、生命に対する価値を感じにくいと考えていた。しかし、セミナーを終えた今は、こうした考えにも変化があり生命観、死生観について自分の中で幅が広がったと思う。特にセミナーを通じてそう感じられた機会、きっかけとしては大きく３つ挙げられる。

１つ目は初日に講演をして頂いた、慶應義塾大学の井奥洪二氏のお話である。井奥氏は研究者としての立場、そして１人の人間としての立場から、科学と生きることについての知識や意見、熱い思いを述べてくださった。お話を聞く前までは、現代において人間は科学技術に支えられて日々を生きているものの、私自身は文系分野の人間であり、そうした科学の実情や進歩については多少無関心でも問題ないだろうという意識があった。しかし、科学が今直面している問題は科学者だけでなく、それ以外の一般の人々にも深く関わってきている。生命について研究が進むにつれて人間の倫理観や哲学が問われるようになり、井奥氏もその点について非常に苦悩していることがうかがえた。そして、こうした問題は近い将来に社会問題として私たちにも問われることになる。その時にどういった立場からどのような意見を発するのか、ということを考えておく必要がある。そのためにも文系や理系という枠を超えて科学者や研究者の立場、意見を少しでも理解することが大切だということに気付かされた。

２つ目はセミナー３日目の修験体験である。体験の中で感じたことは、滝行や羽黒山踏破、床固めや南蛮いぶしにしても何か余計なことを考える隙間がなく、とてもクリアな感覚だったことである。普段の生活ではどうしても下らないことや些細なことが気になってしまいモヤモヤした部分があるが、体験中は自分の感じること、考えることがストレートに体に伝わってくる感覚だった。その時は本当に「生きている」ということが身を持って感じられたし、とても心地よかった記憶がある。今でもこの時の感覚を思い出すと、生きるということはごく単純で楽しいものだと感じられる。

３つ目は、セミナーを通して様々な人と交流できたことである。セミナー前には他の参加者の方々の事前課題を読むことができたが、本当に多様な意見、考え方があり驚いた。自分と同じように死に偏って述べていてもその内容は全く違っていたり、一方で死以外のことを主題にして述べたりしている内容もあった。１つのテーマ、タイトルの課題を扱うなかでこれだけ意見が異なるというところに生命を議論することの難しさ、面白さを感じた。実際、初日に班ごとの意見をまとめて発表する機会では、どの班もまとまった意見をしっかり述べるのに苦労しているように見えた。しかし、こうしたテーマについて日常で取り扱うことはまずなく、意見のやりとりは非常に新鮮なものだった。そして、最終日の班でのグループワークや最終発表で話を聞いていると、皆で同じセミナーをやりきったことで共通の考えや感覚というものが少し生まれたように感じられた。もちろん、個人によって考えるところは違うし、セミナーでの経験がどのように活かすかという点も異なってくる。だからこそ、先生方やスタッフの方も含めて参加者の方々とこのセミナーについて振り返ったり、その後のことについて話し合えたりする機会はまた今後もあればと思う。

こうしてセミナーを振り返り自分自身の考えを改めてみると、以前と比べて「生きる」ということを直接的に考えるようになったと思う。では、「生きる」とは何か。その答えは誰１人として全く同じものはないと考える。生まれ育った環境やそこから感じ取るもの、そこから取捨選択してきたことなど、自分の過去において全ての要素が一致することは無い以上、共通の正解はないはずである。そのため、強いて言えば、「生きる」とは過去を背負いながら現在や未来において感じること、考えることだと思う。最後に、今、そして将来になって振り返った時、庄内セミナーでの経験は間違いなく貴重なものであり、そうしたセミナーを設けて下さった方や、セミナーで関わった方に感謝したい。本当にありがとうございました。

たらこスパゲッティ的「つながり」観

商学部 1 年 古島 理沙

「生きる」ことについて話し合うと、「つながり」の重要性というキーワードが出る議論が少なくない。実際、庄内セミナーにおいて、私たちの班はそのような結論に終着し、他にも似たような議論がなされた班が複数存在した。自分の生死を見つめると、常に誰かが寄り添い、「つながり」を持っている。だから、そのような結論に行き着いたのはごく自然のことのように思う。そこで、私の死生観および人生観とは、自分の生死とそれに関連する「つながり」を包含したものであると考えた。それに則り、庄内セミナーを通して気が付いた自分自身の「つながり」観を考察する。

「つながり」を辿れば、どこまでも無限に繋がってゆく。家族や友達など身の回りの人を始め、この庄内セミナーで知り合った仲間とも繋がっている。宿泊した休暇村羽黒で食べた美味しいご飯は、きっと数えきれないほど多くの庄内の方々や、さらには海の向こうの言葉も通じない外国の人とも沢山繋がっているに違いない。食べ物に限らず、持ち物すべてにおいて同じことが言える。だから私はそのような「つながり」を考えて、「あぁ、世界中と繋がりながら私は生きている」と自然に思っていた。

しかし、それはあくまで「今、地球上で生きている私」というアイデンティティーでしかないということに気が付いた。現代を一緒に生きているという現実味からか、今この瞬間という横軸のつながりは非常に意識しやすい。一方で、「先祖より日本人の血を受け継ぐ私」というアイデンティティーは自分の中では存在感が薄かった。インターネットの普及に伴って、さらに外国の誰かに思いを馳せることは容易くなったが、日本の歴史を学ぶことによって、彼らの存在が今の自分が密接に繋がっていると実感することは難しい。第一、私は自分の曽祖父母より、厳しい労働環境化でカカオの生産する子供の方が想像に容易い。このように、私の「つながり」観は非常に横長の形状をしており、認識のしやすさによって無意識に「つながり」の中にも優劣をつけていたような気がする。

この感覚に気が付いたのは、庄内での経験を通して「自分が日本人である」という感覚を何度も意識させられたからである。特に自然観において、日本の独特な地形や気候に伴った感性が自然に自分自身にも根付いていると感じた。庄内で感じたそういった日本人らしさは、鶴岡総合研究所の東山昭子氏の「庄内文化論」の講演の中に出てきた「風（ふう）」という漢字に集約できると思う。広辞苑によると、『風（ふう）』とは、「ある地域・社会などの範囲内で一般に行われている生活上の様式。また、やり方・流儀。風俗・習慣。ならわし。」と記載されている。具体的には、「風習」「風俗」「風情」「風物詩」といった単語がある。例えば、「風物詩」は英語で「seasonal tradition」、そして「風情」は「taste」と訳す。しかし、私は日本人としてその英訳以上の深い意味を感じ取った上で、それらの単語を用いている場合が多いと思われる。私が感じる風情は、数百年前の日本人とどれだけ離れているかは想像し難い部分はあるが、そう遠くないであろう。その点で言うと、東山氏の「風 (ふう)」という感覚が自分には非常にしっくりきた。「風 (ふう)」を感じて愛でる、という言うなれば日本らしさは、日本人であるという感覚に乏しい自分自身にも根深く息づいていると感じた。

一方で、やはり部屋も食べ物も、目に見えるライフスタイル全般は洋風化している。また、自分の意識すらも日本でなく世界に向きがちになり、歴史的に見ると私を含む現代人は洋風化した日本人であると思う。私は人として生まれてきて、いつか死ぬ日が訪れる。では、私が生きているということはどういうことなのだろうか。自然の摂理に基づき、先祖から後世へと繋ぐ役割がある。その一方で、「今」「日本人として」「私が」生まれてきたということにも価値も見出したい。それを踏まえて、どのように生き、どのように人と繋がってゆきたいかを考えると、私の場合は「たらこスパゲッティ」だと思う。

たらこスパゲッティは、イタリアから伝わった「パスタ」に日本の「たらこ」を融合させ、細切りの海苔をふわふわさせた食べ物である。さらに、お箸で日本式に食べれば尚良い。おそらく、てりやきバーガーが好きな日本人も多いに違いない。これらは、輸入された外国文化に和の要素を取り入れた、代表的な製品であると言える。「素材」は多少変わっても、本質的な「様式」は変わらない。一方的な欧米化の流れで、古き良き日本が失われつつある現状に危惧する声も少なくないが、私はこのような他の文化を上手に日本式に転換してゆく創造性も日本人の誇るべき点のひとつであると考える。そういった文化的側面での転換と共に、日本人の生き方・繋がり方にも似たような作用を促しつつあるのではないか。

庄内セミナーでは、ここで述べた感覚的教訓よりはるかに壮大で圧倒的な自然の力を体感し、はるかに深い死生観や身体感を学んだ。考えさせられることが多かった反面、それでもなお、やはり私自身の根源が「都会的でオシャレに輝きたいと思う自分」であるのは変わらないとも再確認した。例えば、即身仏を見て「ただひたすらに苦しそうな死」を感じた。それと同時に、即身仏の「自分が苦しむ代わりに他人に幸をもたらす」という概念とは対照的に、私は「自分が今様々な

ことを経験・吸収して、実際に何かの製品またはサービスなどを通して他人に役に立ちたい」とより強く思った。私はあの場に置かれてもなお、自分がどこまでも典型的なシティーガールであるという感覚を抱いた。それを踏まえて、常に庄内にいることのない自分が庄内セミナーで感じたことを永久的な学びとして刻めることとすれば、やはり自分の奥底に存在する「風」を重んじるという点に尽きる。今まではカルボナーラを目指していたけれども、たらこスパゲッティこそが自分であると思う。横長の長方形のような形であった「つながり」の図形を、庄内で感じた感覚を常に備えながら、より大きく、そして限りなく正方形に近い形に拡げてゆきたい。

「生命」を考える

文学部２年　松舘 幹基

はじめに

３泊４日の庄内セミナーは、私にとってこの夏一番の思い出となった。日常では得ることのできない知識や体験、そして生命について真摯に考える多くの人々との交流は、どれも刺激に満ちており、今の私に大きな影響を与えた。今後はこの思いを胸に秘め生活し、そしてこのセミナーでお世話になった方々への感謝の思いを込めつつ、レポートを記したい。

形ある命

私たちの命の起源は４０億年前の地球に求められる。月と地球の距離が今よりも近く、月の引力の影響が強かった時分。海が、あたかも揺りかごのように揺れ、そして、ある時膜ができた。これが、われわれ生命の起源だという。

その後、私たちの祖先はさまざまな変遷を遂げ、そしてついに、人間という形にたどり着いた。あの膜は何も、人間という形を意図していたわけではないだろう。しかし、生命は40億年目にして、われわれの形となったのだ。

ここからは何がいえるだろうか。ひとつは、人間が生命の終着点ではないということ。不思議なことに、われわれは人類が途絶えることと地球の終わりをイコールで考えるきらいがあるが、もしもそれがイコールになるならば、それは人類が地球をほろぼす時である。地球が存続するかぎり、われわれは生命変遷のさなかにおかれる。もうひとついえることは、生命は進化の途上でさまざまな形をつくり、容易に滅ぶことのない多様性というシステムを築いているということ。このため生命は、いずれかひとつの種が滅んでもその他の種は容易に滅ぶことはない。ある種残酷にも見えるこのシステムにより、生命は命の火種を今日まで灯し続けてきた。

形ない生命

しかし、われわれ人間は失った命にも思いをはせる。葬式をあげ、お墓や仏壇などをつくり故人を偲ぶ。盆の時期になれば、きゅうりやなすで乗り物を作り、玄関口に水を置くなどして、故人の来訪を心待ちにする。その時にはたしかに、われわれは形のない生命をみる、あるいは感じる。そうすることで、われわれは今ある自分の命の必然性、有限性をかみしめる。

方言

存亡が関わるのは、何も生命だけではない。地方語たる方言もまた、存亡のふるいにかけられる。その背景には、メディアの普及、交通網の発達があげられるが、そもそも方言とはどのようなものか。

方言は、生活文化、精神文化、歴史文化に根ざしたもので、その土地の風土に影響を受ける。それは、使用される地域内ではその言葉の伝達以上の意味を帯び、強固なコミュニティ形成に役立つ。つまり、限られた区画内でこそ、その力を十二分に発揮できる。

しかし裏を返せば、ひとたびその枠が取り払われると、方言は一気にそのもろさをあらわにする。存亡の危機に立たされてしまう。そして、今日においては庄内もまた、現実問題として方言存続に向き合わねばならない状況に追い込まれている。

生命の考察

40億年前に端を発する生命。膜をもつことで自らの範囲を規定し、進化を遂げてきた。しかし、それは同時に競争という厳しい現実をもたらした。自然界ではまさに弱肉強食、人間社会においても容赦なく差別化される。それは、人種、国籍、階級、身分、言語、宗教、思想、学歴、収入、年齢、性別など、ありとあらゆる尺度から行われている。われわれ人間は目に見えるものはもちろん、目に見えないあらゆる要素をも外部化し、自らの存在を規定している。これにより、さまざまな分野における競争や紛争が今日でも絶えることはない。われわれが自らを規定し区画した枠がとりはらわれると、個としての自分の存在が揺らぎ、生命存亡の危機に追いやら

れてしまうからだ。生命はそのように自らを守る戦いを通して、進化を遂げてきた。

だが、生命が同じ形を保持し続けている例は少ない。時が進むにつれて、生命はありとあらゆる形へと変わっていった。いうなれば、生命とは、さまざまな営みの中で育まれてきた命の結晶である。この世に生を授かってからは、1つとして同じであり続けることはできない。そのような意味で、外部と接触して自らの生のあり方を模索することは、もはや生物の宿命といってもいいだろう。

生きること、死ぬことへの考察

以上のような考察は、生命を俯瞰してみた時に一種の希望をそえることができる。しかしそれは、生命という命の営みのダイナミズムのなかでとらえるからこそ、意味あるものとして光を帯びる。われわれが日々生きている中で、そのことに思いをはせる機会はほとんど無に等しく、したがって、それはあまり意味をなさない。では、どのような問い立てが有効か。

「なぜ生きるのか」という問いは、おそらく誰しもが一度は立てる問いだろう。そして、その問いに明確な答えを提出できた人は、おそらくあまりいない。もちろん、ある一時点での目標を生の目標と同一視することは可能である。しかしそれでは、答えとしてはあまりにも希薄だ。

そもそも、「なぜ生きるか」という問いは「生きること」をみていない。その問いでは、生を直視することができず、それこそ「人類の発展のため」「種の保存のため」などのようなよほど広大な絵空事に答えが収斂してしまう。そのために自らの生をかけるには、よほどの事情がなければ成立しない。

ではどのような問いがよいのか。それは「どのように生きるか」という問い。自らの日々のあり方を模索する問いが、もっとも有効的であろうし、そうすることで生を直視することが可能となる。この思考法は修験者や庄内藩士に習ったものであるが、すぐに結果を求める風潮のある現代にあっては、非常に重要な視点であると私は思う。同様に、「なぜ死ぬか」よりは「どのように死ぬか」がより生に根ざした問いとなる。それにより、われわれは自らの生をより豊かなものにすることができるだろう。

おわりに

「どのように生きるか」「どのように死ぬか」を決めることは容易なことではない。人は外部の環境に大きく左右されるからだ。それは人の意思なく生命が左右される可能性を示唆している。限りある生が、不意の事故で明日には消えてしまう可能性さえある。だから、われわれは生きているうちに、自らを見つめなおし、自分がどうあるべきかを日々問い続けなければならない。そうすることが、生きるということへの最大限の営みにつながるだろう。

死・生・観

文学部１年　矢部絵莉香

生命は尊いものなんだって連呼する人々が嫌いだった。わたしはひねくれているので、生きていないなら尊くないのかよ、なんて思ってモヤモヤした。夢のなかで愛するひとが死ぬたびに泣いたり、お気に入りの夏茶碗が割れたりもらったネックレスをなくしてふさぐことはあっても、遠い国で知らないひとがたくさん死んだと聞いても悲しくなかった。テレビで伝えられる死亡者数はわたしと隔たったところにある数字で、おやつに食べたシナモンロールのカロリー数のほうが、もっと身近で深刻で、日常的な想像の範囲内にあるのだった。24時間テレビも好きじゃない。感動もののドラマだと分かっていたら最初から見ない。犬が死んだり癌になったり生き別れの血族を探すような。見たら泣いちゃうって知っていたら絶対に見ないのに。「死を弔うことが優しさの証明になるから、みんな殺し合いをするのかなあ」。生まれてこのかた20年間身近で人が死んでいない。大怪我はしたことない。入院の経験もない。もちろん生死の境を彷徨ったこともない。葬式に出た記憶がない。

命って本当は、世間で信じられているよりもずっと軽いものなんじゃないかという気がしてならない。わたしは想像力に欠けた人間なのだろうか。ある意味ではそうかもしれない。でもわたしは自分の想像力によって救われたことがたくさんあるので、そんなふうに言い切れないんだってことは自分が一番よく知っている。現実逃避のスペシャリストことえりか。きっと経験が浅い、世間知らずといったほうが近いのだろう。わたしの死にまつわる記憶は皆無である。この二十年間で死と無縁すぎたのだ。運がよすぎるの。神に愛されすぎている。見えない力の加護のもとにある。それで「生きてる」ということがどういうことだかわからない。死んでるんだか生きているんだかが不明。

死体が見てみたくてたまらないのにそんな機会は巡ってこない。映画みたいに土左衛門は流れてこないし、跳ねられた少年が野ざらしで放置されていることもない。みんなTwitterで死にたい死にたい言ってるくせに、実際だれも自殺しない。つまらない。人間って案外死なないものなのかもしれない。わたしが所有する唯一の死は自らの死の予測。
人身事故に遭遇したいと思っているのに、人々は必ずわたしの背後で飛ぶ。あるとき本物の人体模型を展示していると聞いて北京の国立科学博物館に赴いた。ホルマリン漬けの人間の心臓、胃、胎児、ペニス。映画のセットのようだった。それはまれでマッドサイエンティストの実験室。わたしにとっての死はフィクションの域を出ないのであって、それを脱してリアルな死というものを知りたいのに、加工された死体を見ても、結局なにも変わらなかった。わたしはいまだにキャッスルロックの線路の上を歩いている。

しかし庄内セミナーに参加することで、少しはまともに現実と、生きることと、そして死の意味と、少しは向き合えたのではないかと思う。

庄内で一番愉快だったのはやはり、注連寺の即身仏だ。このご遺体はわたしたちの誰よりも長く残って大切にされていくのだろうなと思うと不思議だった。即身仏といって思い出されるのは角川映画の「湯殿山麗呪い村」に登場するおどろおどろしい骸骨であるけれど、お寺の方の話を聞いて、そのイメージは一新された。彼が即身仏に至るまでの精神力の強さや、仏がその後たどった数奇な運命など、非常に興味深かった。

また、一緒にセミナーに参加した人と生について議論していくなかで、生きることを考えるにあたっては死を通じてではなくてもよいのではないかという意見があり、それも新鮮であった。自分は死に拘わりすぎていたのではないかと気がつくことができた。

大好きな『ノルウェイの森』が休暇村の本棚にあったので、眠れない夜に読み返しているとき、「生は死の対極として存在しているのではなく、その一部として存在している」という箇所が目に留まった。セミナー中にこの一文を目にして以来、ずっと頭に引っかかっている。現実におけるリアルな死は、実は美しくもロマンチックでもなく、あっけない地味なものであるのかもしれない。リアルな死を知らなくて、三島や太宰や芥川にかぶれたせいで、死を夢見るようになった。フィクションにおける死は、あるときは美しく、あるときはドラマチックで、またあるときは圧倒的な運命のもとに偉大に見えた。わたしにとって幼少の頃から最も完美な妄想の対象で、その神秘は魅力としか映らなかった。しかし現実の即身仏は、恨みを晴らすために次々と歴史学者を呪い殺す骸骨とは程遠い木乃伊で、生きた人間たちの損得勘定のもとで揺れ動いていたし、班内発表で知ったのは死の悲惨と無生産性であった。

生きているという実感が湧かないこと、命の重さが実感として理解できないことは今も変わらないが、死の魅力から解放されたような清々しい感じがある。これが庄内での数日間を通して得た一番の収穫だ。

私の生命観

社会人　横山　勝

今回の庄内セミナーで、一番印象深かったことは羽黒修験のことであった。

精神的にそれほど堅固ではない私は、これまで単身で修験体験へ参加することにはちゅうちょしていたが、今回は母校の他の学生各位の手前恥かしいこともできず、鈴木正崇先生やスタッフの先生方、いでは文化記念館の方々も助けてくださることをうかがい、何とか参加できた、というのがほんとうのところである。実際、修験道の装束を身につけ、金剛杖片手に、瀧行や山野を駆けるのは、身の引き締まる体験であり、おそらくわずかばかりではあるが、修験の世界を味わうことができたのだと思う。

また、ちょうど時期は、秋の峯入りのとき、我々と時同じくして、たくさんの修験者がお山に入っていた。案内をしてくださった先達も、実際の修験者が峯入りの１週間ほどをどのように過ごすかを案内してくださったし、鈴木先生に見せていただいた記録フィルムから受けるものも圧倒的であった。「他言は固く禁制でござる。」、「承けたもう。」という、配偶者や親子であっても他言無用の世界であるから、一番の秘事は実際わからない、しかし、理屈で頭に訴えるのではなく、意識に直接何かが通じるようなことを感じさせる世界がそこにはあった。

峯入りはまさに死と再生の儀礼のようである。普段は世俗で日々の生活を頑張っている人々が、この時期には出羽三山の地に来たる。本来の修験の人は、最初の数日は食事も採らず、睡眠も途中で断たれる。そして、私たちも少しだけ体験した息もできないような体験（南蛮いぶし）を経て、いったん古い自分は死して、そこから新たな自分が生まれる。

仏教の峯入りでは、正善院黄金堂で梵天の儀式が行われる。これはまさに、再生のはじまりである。そこからお山への参道は、産道にも通じるらしく、引き続き再生の儀式が行われる。食事ができないのは餓鬼界、洗顔などを禁じるのも畜生界、ついで相撲等々、十界行の世界を一つ一つ体験し、ついには人間界、天界と到達しても、そこからも仏の境地に行くまではなかなか大変のようである。

実際の行では、険しい山を手と足でようやく登って行くようなところもあるらしい。聞けば、何年も来ている人でも、最初の１、２年は、怖かったし、ほんとうに生命を落とすかもしれないと思ったとも言うが、何年か続けているうち、全く異なった境地に達するらしい。そうなると、頭で何が起こっているかではなく、身体全体から、草木の一本一本、獣、風、においなどを受け止め、まさに生きていることを実感するらしい。

仏教の峯入りの最後には、「おぎゃあ」と産声を上げて、火を飛び、そのまま羽黒山頂から産道を駆け下り、娑婆に戻る。これこそが再生の儀式だ。

偶然、私は庄内セミナー終了後、能除大師・蜂子皇子の尊像の特別拝観のため、羽黒山頂に戻った。そのときが、まさに、仏教の峯入りの最後のときであった。峯入りの日々を終え、再生した人々の姿は神々しく、まさに六根清浄を体現していた。

私の持つ生命観で、今回の羽黒修験を通じいちばん変わったことは、人は時々このような死と再生が必要なのではないかということである。生命は一度限り、やり直しが効かないから大切という側面がある一方、擬似的に死と再生を繰り返し、それを節目にレベルアップすることも必要だと感じた。このとき、ゲームの世界のようなレベルアップやリセットが行われるのではなく、擬似的に死を体験するということが必要だと思う。

また、最終日の晩は、出羽三山神社の八朔祭も行われた。火を司る祭りだが、こちらは今でも男性しか参加していないこともあり、昼間見た峯入りや庄内セミナーでの我々の姿とは大きく異なっていた。ここでは、私たちが簡単にそうだと思っている日本文化の伝統の中で、明治はじめの神仏分離政策や修験道禁止令がいかに大きな変革だったかを痛感させるものであった。二天門におわした仁王様は、少し離れたところに移られ、門は随神門となって、羽黒山の様子も大きく変わった。

私がセミナー参加前に考えていた、注連寺の即身仏さまも、大変な苦行の上過酷な人々の生活のことを考え、入定した意味も大きいが、この近世から近代という変革の時期の影響も無縁でなかったことも感じることとなった。実際、山に入っての行も、ほんとうに大変なことで、簡単にできないことだと痛感もしているが、入身行もとてもつらいことだと思う。近世以前の三山は、それぞれ大日如来様、阿弥陀様、観音様が本地仏様であり、近代以降は、出羽三山として一番高い月山が天照大神と並ぶ三貴子月読命のお山となって、意味するものが変わってきた。歴史的には、湯殿山信仰の深さ、近隣の鳥海山、葉山とも絡んで、まさに日本の歴史の様々な側面が集約している地でもあった。そして、庄内の地は、江戸時代海坂藩のモデルとなった地でもあり、庄内論語の体験など現地の様々な地を巡ると得ることの多い地であった。現在は最先端のバイオテクノロジーの発信源となっている地でもあり、わずかの間に、私たちは様々な貴重な体験ができた。

羽黒修験のほかでは、井奥洪二先生のご講演が印象的で

あった。先生は化学者として、様々なご研究をされている中、東日本大震災や福島原子力発電所で起こったことを目の当たりにされ、世のリーダーとなる文系の学生に対し、その体験を伝えていきたい、とおっしゃっておられた。先生のお話も、まさに魂が揺さぶられるような内容であり、自分の普段の生活、生き方を考えさせられるものであった。

考えれば、わずか数日間、住み慣れた地を離れ、庄内の山川に守られ、大変美味しいお米などを身体に入れただけなのに、体験したことが多く、少し日が経ったのに、まだ消化しきれていないところがある。それは今後もいろいろ考えていきたいと考えている。

最後に、このような企画をしてくださった義塾教養研究センターの先生方や地元庄内の方々、セミナーをもり立ててくださった方々、そして、一緒に様々なことを学んだ方々に、改めて深い感謝を申し上げたいと思う。

2014 年度「庄内セミナー」報告書

資料編

1．参加者構成

No.	所属	学年	氏名	No.	所属	学年	氏名
1	法学部	4	池邉由望	20	経済学部	2	谷　昭仁
2	経済学部	2	石川　悠	21	文学部	1	谷藤瑞咲
3	文学部	1	伊藤拳太	22	文学部	3	東野隆弘
4	法学部	2	奥田しをり	23	法学部	4	野町美帆
5	KBS	修士1	折井駿太	24	経済学部	3	濵崎和久
6	商学部	2	叶内彩香	25	経済学部	4	降旗隼平
7	経済学部	3	木村つぐみ	26	商学部	1	古島理沙
8	法学部	2	工藤大貴	27	文学部	2	松舘幹基
9	文学部	3	国枝奈々	28	文学部	1	矢部絵莉香
10	理工学部	2	熊田匡仁	29	社会人：公務員		横山　勝
11	理工学部	2	小杉拓磨	30	経済学部	3	吉越大貴
12	法学部	4	小東弘毅	31	スタッフ： 慶應義塾大学理工学部教授		小菅隼人
13	理工学部	2	坂口　広	32	スタッフ： 慶應義塾大学経済学部教授		不破有理
14	法学部	1	佐々木凌	33	スタッフ： 慶應義塾大学法学部教授		大出　敦
15	法学部	2	佐々木陽菜	34	スタッフ： 慶應義塾大学法学部教授		横山千晶
16	文学研究科	博士2	佐藤　章	35	スタッフ： 慶應義塾大学出版会		小磯勝人
17	経済学部	2	周　彦甲	36	スタッフ： 慶應義塾大学DMC研究センター		村上篤太郎
18	経済学部	4	高井宏輔	37	スタッフ： 慶應義塾大学DMC研究センター		松澤聡比古
19	法学部	4	髙林一樹	38	スタッフ： 慶應義塾大学教養研究センター		日水邦昭

2. 第５回庄内セミナー　アンケート結果

・実施日：2014 年 8 月 31 日（日）（セミナー最終日）
・回答数：30（ただし、項目によって複数選択・複数回答・未回答あり）

〈項目別結果〉

１．今回のセミナーについてはどのように知りましたか？
ポスター：18
Web サイト：4
チラシ：2
教員から：3
友人から：5
その他：1（設置科目パンフレット）

２．今回のセミナーについて、以下の項目に沿ってご意見をお聞かせください。

１）テーマについて「生きることを考える―庄内に学ぶ生命」
難しかった：12
適当だった：18
やさしすぎた：0

【主な意見（自由記入）】
・「生きること」とは何か、4 日間を経てもはっきりとした答えは自分の中にまだうかんでいませんが、人それぞれに「生きる」への考えがあり、それを吸収できたことは非常に良い経験でした。（法学部）
・普段の生活や大学の授業では、なかなか考えることのないテーマだったので、少し難しく感じました。しかし、その反面勉強になること、考えさせられることが多く得られたと思います。（経済学部）
・「生きること」とは何か考えることがあっても、答えのない問いであるため「考える」ことを避ける自分が以前あったのですが、この機会に他者との対話、先生の講演を通じて大きな命題について考えることができて良かったです。（法学部）
・難しいし、3 泊 4 日なんかでは答えが出るはずのないことだが、誰しもが考える・考えなくてはならない問題だと思うので、よいテーマだと思う。（法学部）
・生命観だけではなく、途中から身体観も加わり、少し大変だった。（経済学部）
・前提知識の有無によって個々の考えが大きく異なることもあり、とても楽しかったです。（経済学部）
・抽象的すぎて、まだ今の自分には深すぎた。（商学部）
・生きることを正面から考えられるようになった。（経済学部）
・庄内という地であったからこそ、生命に関して、深く、多様に、学べたように思います。（文学部）
・様々な分野から共通のテーマについて聞くことができて面白かった。（法学部）
・修験体験をしたことで、生命についていろいろ考えた。お話を伺った方も大変よい講師陣だった。（社会人）
・固定観念であった「生きること」について、この体験を通して柔軟かつ多様に変化した。（経済学部）
・庄内の自然に囲まれた土地で考えるにふさわしいテーマだった。日常で話のテーマになりづらいことだからこそ、この機会に取り上げられて良かった。（法学部）
・皆が一度は考えたことがある問題だと思うので、取り組み易かったと思います。（商学部）
・「難しい問題」として適当であったと感じます。（法学部）
・宗教になじみがないと、少し尻ごみしてしまうかもしれません。（文学部）
・いのちに対する問いを、参加者がそれぞれ考えられるようなセミナーだったかと思います。（文学部）
・生命の”源”というのが事前課題にあったが、源というのが捉え方が大きくできるので難しかった。（法学部）
・踏み込みすぎず、浅すぎずで良かったと思います。（文学部）

２）時期について（8 月 28 日～ 8 月 31 日）
適当：30
他の時期にすべき：0

【主な意見（自由記入）】
・過ごしやすい気候でとても良かった。また本格的な修験がすぐ近くで行われているということに臨場感が沸く。（経済学部）
・涼しすぎず暑すぎず、食べ物も美味しく天気にも恵まれ、とても良かったです。（法学部）
・夏休みのど真ん中ということで、長期の予定は立てられないと思った。（商学部）
・丁度良い気候であり、修験の時期でもあるので適当だと思います。（法学部）

３）スケジュールについて
もう少し余裕がほしい：9
適当：15
もう少し内容を盛り込んでも良い：6

【主な意見（自由記入）】
・朝から夕方までという時間帯はとても良かったですが、その時間内での濃度を高めてもよかったのかなぁと感じます。（法学部）
・日程的には充分であるが、夕食のあと等休む時間が少ない、夕食後の講義前に 1 時間程度休みがほしかった。（経済学部）
・観光スケジュールが少しギリギリだった、あと 30 分あれば･･･と。（文学部）
・休み時間が長く、少しもったいない気がしました。（文学部）
・八朔祭の見学がスケジュール中にあればよかったです。秋例祭も見てみたかったです。（文学部）
・自由時間がもう少し欲しかった。（法学部）

・近くを自由に見回って空気になじむ時間が欲しい。（文学部）
・食事と夕講、食事と出発の間隔がもう少し欲しい。満腹で苦しかった･･･（法学部）
・修験体験の日にちをもう1日延ばして頂けると、山中に入ってより深く､生について考えられた気がする。（自分を追い込むことで･･･）（理工学部）
・余裕がない時と手持ち無沙汰な時の差が激しい。（経済学部）
・じっくり感じてみたいものがあったので、時間的な余裕が欲しかったです。（経済学部）
・色々な活動がありながらも楽しめる余裕もあってよかったです。（文学部）
・修験の内容はもう少し命の危険を感じるくらいが生について考えるのに妥当だと思う。階段は登りたかった。（法学部）
・夜行バスで来る人も多いので、開始時間を早めたり、終了時間を遅めたりした方がいいと思った。（法学部）

4）講演について

■8月28日「即身仏―身体を考える」（講師：井奥洪二氏）
とても良かった：18
良かった：10
普通：1
良くなかった：1

【主な意見（自由記入）】
・質疑応答がとてもよかった。先生がとても人間的にすばらしい人だった。（法学部）
・我々若者が考えなければならないiPsなどの生命倫理について本当に考えさせられた。個別にも質問にいったが、本当に丁寧に答えてくださって有難かった。（経済学部）
・科学者でありながら、倫理や宗教観についても貴重なお話を聞けました。（法学部）
・興味深かったです。翌朝、井奥先生とお話させていただいてさらに深まりました。（文学部）
・先生の東日本大震災のご体験や科学者として感じられたことが強いメッセージとして伝わってきたと思います。（社会人）
・理系の観点から生命について考えられて有意義でした。特に再生医療の話が興味深かったです。（経済学部）
・iPsの可能性と危険性、科学と倫理のあり方が問われる内容だった。（経済学部）
・これからの時世は、理系と文系、両方の見識をもった人でなければならないのだとつくづく実感した。（理工学部）
・自然科学の面から生命を捉えるのが興味深かったです。（文学部）
・地球誕生～iPsまでは、自分の知っている知識だったので、もっと詳しく聞きたかった。（商学部）
・科学的見地のお話が聞けた。「即身仏」だと文系のような話であると思っていた。（経済学部）
・自分自身では普段考えの及ばない、科学的視点から考えることが出来、とても有意義でした。また、井奥先生の志に非常に胸を打たれました。（法学部）
・即身仏よりも生命倫理に力を入れてお話くださった感がある。翌日の参拝を踏まえたテーマ設定であり、前提知識を教えて頂いた事は良かったが、もっと話してくださる方の話しやすいテーマでも良かったのではないか。（理工学部）
・様々な視点で生命を考えられるということ、科学技術が生む問題に対する準備の必要性が知れてよかった。（文学部）
・即身仏についての講義を拝聴したかったため、テーマと内容にややズレを感じた。（KBS）
・現代議論の的となる問題を取り扱っていただき、とてもためになりました。（商学部）
・自然と科学について、基本的な知識や考え方はもちろん、井奥先生自身の熱い思いや考えを聞けて、とても参考になりました。（経済学部）
・井奥先生の東北でのご経験に基づいたバイオに関するご意見が非常に印象深く素晴らしい講演だった。（法学部）
・文理両方を学び議論を交わしていくことへの井奥先生の切実な思いに感動し、自ら実践していこうと思いました。（法学部）
・講義の中で一番考えさせられ、井奥さんのお考えにも触れられたことで満足できた講演でした。（法学部）
・科学的な視点でのお話もさることながら、その後の行程に同行してくださったので、とても気軽に質問が色々な場面でできた。（経済学部）
・もっと一ヶ所にフォーカスした話をして頂けると良かった。（法学部）
・身体そのものかと思っていたが、バイオテクノロジーのリスクや倫理についてであり、その倫理についてもう少し考えたかった。（文学部）

■8月29日「庄内文化論」（講師：酒井忠久氏・東山昭子氏）
とても良かった：6
良かった：15
普通：7
あまり良くなかった：2

【主な意見（自由記入）】
・文化にはもともと興味があり、実物のだだちゃ豆と共に語るお姿がとても良かった。内容も非常に充実していた。（経済学部）
・方言や日本語の未来について考えるきっかけになりました。（法学部）
・同じ議題に対し、お2人の意見を照らし合わせるというやり方も良かったのではと思います。（法学部）
・難しすぎた。もっと生命に直結した話の方がよかったと思う。（法学部）

・2名の方のパネル形式で少々情報過多になるのではと危惧したが、我々学生にも分かりやすかった。（経済学部）
・庄内論語の教え方に地域独特な学習精神を感じました。自分で考え、対話することも学習の過程であることが現れていると思いました。（法学部）
・土地と言葉は深いつながりがあるのだと感じました。お二方が交代でお話されていたので、集中力がとぎれませんでした。（文学部）
・欲を言えば、藤沢周平記念館を訪ねた人もそれなりにいらっしゃり、はじめて聞いたという方もおられたので、藤沢周平の作品と生命につなげるお話を聞きたかったと思いました。（社会人）
・質問者の質問に直接的に答えていない気がした。ことばについて、もっと色々な視点から話を聞きたかった。ただ、自らの話術だけでこれだけ聴衆を引き込めるのかぁと思った。（理工学部）
・方言のお話は文化を考える上で貴重だが、「生命」についてのつながりが理解できなかった。（経済学部）
・東山さんの方言のお話が面白かったです。（文学部）
・司会の質問に両先生が答えるという形式の講演は面白いと思ったが、どのような話を聞いていくのか、司会の質問はどのようなものを出すのかについて前もって知っていれば、 聞く側としてとても有難いし、話を深く聞けたかなと思った。（文学部）
・文化について考えさせられる講演で、とてもためになりました。（商学部）
・大変興味深かったが、もう少し基礎的な部分から説明をして頂けるとより分かりやすかった。（頂いたレジュメに関する解説などで）（法学部）
・だたちゃ豆ごちそうさまでした。（文学部）
・お2人を同時にではなく、それぞれ別の時間で講義をして頂きたかったです。（文学部）
・隅々まで庄内らしさを感じられた。（文学部）
・学生をスクール形式でなく、フラットな配置にした方が雰囲気としてとても良く、対話が活発になったのではないか。（法学部）

■8月30日「羽黒修験」（講師：鈴木正崇氏）

とても良かった：13
良かった：11
普通：6
あまり良くなかった：0

【主な意見（自由記入）】

・著書を読みたくなった。（文学部）
・映像からの説明という形式で多くの情報を提供して頂きましたが、事前にもう少し要点を絞った内容にしてほしかったです。（文学部）
・ここまで話すとは正直思わなかった。（文学部）
・”秋の峰”の映像はその日に修験を体験したからこそ、参加者の苦しみなどが臨場感をもって伝わってきて良かったです。（法学部）
・映像では、実際の修験について知ることができ、良かったです。先生のお話からは、日本の信仰について学べてよかったです。（商学部）
・修験体験のお話がより大きな問題（人間と自然の関係）につながっていったことに大きな魅力を感じました。（文学部）
・羽黒修験のレポートを事前に配ってほしかった。目を通した上で講義を聞きたかった。また、内容が高度だった。（KBS）
・自分の勉強不足が原因だとは思うが、話が難しく一回では自分の中に落とし込めなかった。事前に資料が手に入ったら、自分の疑問を講義につなげられたかなと思った。（文学部）
・映像と、実際に修験経験のある鈴木先生の解説により、非常に分かりやすく、面白いお話でした。羽黒に限らないほかの山岳信仰や、日本人の古来の神仏観にも興味が湧きました。（法学部）
・庄内の魅力をあますことなく聴けました。（文学部）
・第一人者の方のお話であったが、最も聞きたいような内容が、最後と質問の部分に集中していたと思う。（経済学部）
・ビデオの鑑賞から先生の「修験」の解説まで、幅広い話を聴けて興味深かったです。私たちの知っている日常用語の奥にひそむ背景などのお話も面白かったです。（理工学部）
・非常によく研究されていて、深い教養に裏打ちされた講談は、難しくもあったが、己の更なる研鑽の励みになった。（経済学部）
・それまでの総括となるような講義をしてくださり、より修験についての理解を深めることが出来ました。（経済学部）
・表面的ではない山岳修験（羽黒修験）のお話で、その日の体験を思い出しながら伺うことができました。先生のご体験（相撲）などのお話も面白かったです。（社会人）
・映像を見させていただきながら、同時に解説をなさっていたのが、頭に入ってきやすくてよかったです。（文学部）
・少し難しかったが、学者として寺院や神社を客観的に見たお話を聞けたのは良かったです。（法学部）
・時間が長すぎると思った。生徒一人一人が修験の感想を言うなどがあっても良かったと思う。（法学部）
・はじめのビデオから、先生の体験や修験の歴史や思想など、幅広く知ることが出来て面白かったです。先生はこの点以外についても博識で、個別質問の時に満足がいく回答を頂けたのでとても良かったです。（経済学部）
・本格的な修験の動画を解説付きで見られたのが面白かっ

たです。（法学部）
・修験体験の前にお聞きしていれば、もっと体験が意味深くなったような気もします。（法学部）
・懇親会にもご出席いただけ、とても有意義な話が出来た。これも自分の普段から思っていたことに手がかりを与えてもらえ、良かったです。（経済学部）

6）修験体験について
とても良かった：15
良かった：13
普通：2
あまり良くなかった：0
無回答：1

【主な意見（自由記入）】
・イメージよりも体験的ではあったが、それでもしんどくて、一回目としては十分でした。（法学部）
・赤子のように産声をあげながら山を駆け下りたかったです。（文学部）
・無理なく体験できましたが、時間をもっと詰められたのではないかと思います。（文学部）
・滝の時間がもう少し長くても良かった。（文学部）
・学問的にみて、あの体験が本当に庄内・羽黒の文化に根付いたものだったかはともかくとして、達成感を強く感じた。（経済学部）
・初めて修験を体験できるという意味では良かったが、もっと深く体験したかった。（理工学部）
・どうせやるならもうちょっとハードなものが良かった。修験体験の内容自体はとても面白かったと思う。（経済学部）
・実際に自然の中を歩くことで、自然のダイナミズムを感じることが出来ました。いぶしや歩く距離などは、身体的に過度な負担がかからないレベルでやっていただき、有難うございました。（商学部）
・人生で一度でも、こうした機会を利用してできたことを嬉しく思います。（法学部）
・日常では決して得ることの出来ない体験が出来、非常に有意義だった。（KBS）
・もう少し厳しくても良かった。（文学部）
・滝打ちが想像と違っていたりしたが、経験出来たのは良かったです。だからもう少し本格的な方が、修行の真髄が分かるかもしれない。（理工学部）
・若干作りすぎとも思いましたが、実感としては強すぎる位のインパクトを受けました。（文学部）
・日常では経験できない、自分自身と向き合う良いきっかけになりました。特に滝打ちでは徐々に冷たさに馴れ、芯から温かくなっていく自分の体に神秘と力を感じました。（法学部）
・スッキリしました。何事も体験してみる素晴らしさを感じました。どうせなら山登りをもっとキツくしてほしい。（経済学部）
・山登りは久しぶりでしたので良い運動になりました。修験体験をする前後で、何かもやもやしたものが払拭された気がしました。（理工学部）
・もう少し死に目に遭いたかった。（経済学部）
・ミニ体験にとどまらず、9日間の修業も体験してみたいです。（経済学部）
・これまで個人ではなかなか気が引けていたのですが、セミナーのメインイベントに参加できたので、意味づけや参加の意欲がうまく導き出せました。（社会人）
・狭い部屋で大勢で燻されるという状況に興奮しました。楽しかったです。燻されている皆さんを見るのも気持ちよかったです。（文学部）
・もう少し頑張れました。（法学部）
・人生でとても希有な体験をさせて頂いた。南蛮燻しなど、その土地や修業でしか得ることができない経験は、本当に今後の人生の何かに役立つと感じている。もう一度滝打ちをしたいです。（経済学部）
・他では出来ない貴重な体験だった。（法学部）
・実際に体験することで分かることはあるので、必須でした。（経済学部）
・まさに「今でしか」経験出来ない機会を頂きました。（法学部）

7）グループワーク、グループ分けについて（人数など）

【主な意見（自由記入）】
・人数は適当だと思いましたが、もう少し他の人とも話す機会が欲しかったです。（法学部）
・1班は4人で適当でしたが、5・6人となると多いような気もします。（法学部）
・グループディスカッションの回数がもっと多くても良かったと思う。（法学部）
・我々の班は6人だったが、丁度良かったと思う。時間的にも全員の意見をしっかり聞けて良かった。（経済学部）
・丁度良い人数で仲良く真面目に議論できました。（法学部）
・ちょうど良かったです。年上の方々と親しくなれて良かったです。（文学部）
・基本的には良かったのですが、もう少し班別で話し合う時間が2日目にもあると良かったと思います。（社会人）
・5人という人数も、学年ごとの配分も適当で、とても楽しく議論できました。（経済学部）
・人数は適当。メンバーも多彩で申し分ない。もう少しグループを活用するアクティビティがあっても良かった。（経済学部）
・丁度良い人数分けだと思う。毎日、最終講義の後に班で一日のまとめや講義内容について話し合う時間があってもいいと思った。（理工学部）
・グループ分けで見知らぬ人と意見交換を強制されるの

は面白かった。（経済学部）
・ちょうど良かったものの、もう少し色々な人と仲良くなりたかった。ほとんどの人の名前を知ることなく終わってしまった。（商学部）
・5人班で、それぞれ個性の強いメンバーであったため、楽しく学ぶことができました。グループワークの回数はもう少し多くても良かったかなと思います。（法学部）
・アイスブレイクの時間をもう少しもらえたらよかったと思う。（文学部）
・グループワークは意見を交換したり、議論できる場でよかったと思う。もう少し、他のグループとの交流があれば良いと思った。（経済学部）
・男女比、学年別人数などがばらばらでどのようなメンバー分けをしたのか分からなかった。思ったよりもグループ行動が少なかった。（法学部）
・グループワークのグループを変えたり、ワールドカフェなど、学生同士のグループワークの活性化が起きる仕組みがあるべきだと思った。（法学部）
・議論しやすい人数でよかったと思う。参加者全体の構成から見て仕方ないのかもしれないが、理系文系混ざったグループだったらまた違った視点も学べたかと思う。（経済学部）

3．宿泊施設について
よかった：23
普通：7
良くなかった：0

【主な意見（自由記入）】
・山中で自然がキレイな場所でよかった。（経済学部）
・清潔なお部屋が何より嬉しかったです。星空にもお料理にも大変満足です。（法学部）
・外の芝生などゆとりを持った周辺に好感がもてた。星超キレイでした。（経済学部）
・食事とグラウンドゴルフが素晴らしかったです。（法学部）
・ご飯も美味しく、施設自体が程よい広さでした。（文学部）
・プライベートでまた訪れたいです。（経済学部）
・非常に快適で過ごしやすい環境でした。また泊まりたいと思わせてくれるような旅館でした。強いて言えば、インターネットが繋がらなかったのは少し残念でした。（理工学部）
・ご飯が美味しくて感動しました。（文学部）
・ご飯がとにかく美味しかったです。空気も美味しく、星も綺麗で、素晴らしい施設でした。（法学部）
・スタッフの方々が親切に対応してくださった。（理工学部）
・部屋、風呂場ともにきれいでした。食事もボリュームがあり、種類が豊富で、とても美味しかったです。（商学部）
・防音が少し薄いかと感じた。（文学部）
・学習を目的としているため、多少の不便があってちょうど良かったです。（文学部）
・想像以上に綺麗で、ごはんも最高に美味しかった。（文学部）
・交通の便があまりよくない点がむしろ良かったと思う。常に山々木々をながめながら目的地に向かい、そして帰ってくることが出来た。（経済学部）
・アメニティの用意もよかった。（法学部）

4．現地までの交通手段をお知らせください。
JR：14
バス（夜行）：18
空路：2
自家用車：0
その他：0

5．交通費について
・参加者の平均交通費：17,733円

6．参加費用（参加費＋平均交通費）について
安い：18
適当：12
高い：0

7．本セミナーでこれから取り上げてほしいテーマがあったらお書きください。
生と死／自然と人間／漁業体験／月山・湯殿山／日本の古い生命観・掘りおこし／死について／自然の中で考える人間関係／神社の修験／座禅修業・寺そうじ体験／文系と理系の付き合い方／全都道府県バージョンの教養研究セミナー／性について／生命ラボでの実験

8．その他、庄内セミナーに関して自由に意見を述べてください。
・短い期間でしたが、内容が濃いセミナーだったと思います。それだけに、もう少し長い期間でセミナーを実施できたら、自分の考えをより深めることの出来る良いものになると感じました。（経済学部）
・体験も参加者との対話・議論も、自分にとってためになるものでした。学内や日常では出来ない話も、「できる人」と分かっているからこそ話せました。今後もセミナーが続けばと思います。また体験直後だけでなく数ヵ月後に意見を交換する機会があれば、また違った議論が出来る気がします。（法学部）
・放っていたら一生出来ないだろう種々の経験ができ、非常に良かった。（理工学部）
・個人やサークルでは体験できないような貴重な経験が出来て、参加してよかったと思った。これからもこのような活動を続けてほしいと思う。鶴岡は正直、個人旅行では行こうと思わない場所だが、だからこそこのような機会を使って来ることができて良かった。自然の力を感じた4日間でした。（法学部）
・生命に関して本当に考えさせられる3泊4日でした。時が過ぎ、この体験の記憶が薄れようとも、ここで得た経験や素晴らしいと感じたことは、絶対に一生私の中で残ります。素晴らしい庄内セミナーを有難うございました。（経済学部）

・素晴らしいセミナーで非常に充実しておりました。また参加したいくらいです。季節を変えて、冬のセミナーなどのイベントがあったら是非参加したいです。（法学部）
・最初のマインドマップはありのままの気持ち、イメージが描かれていたが、最後のは「こう書くべきであろう」というニュアンスを感じてしまった自分がいて、なんと日本人らしいんだろうと思った。もしここに海外の人がいたらもっと柔軟な発想が生み出されたような気がして、少し物足りなさが残った。（商学部）
・今年度は社会人が１人で、学生さん皆さんはじめ、スタッフの方々に大変助けていただき、私にとっては楽しく貴重な体験になりました。特に皆さんがセンスに優れ、他の仲間に思い遣りを以って接し、様々な夢を持っていることに触れ、頼もしく思いましたし、私も少しパワーを分けていただいたと思います。（社会人）
・都会に普段暮らしていて、水や山や森について、日常生活とは何か隔たりがあるものと思っていました。今回のセミナーを通して、水や山について改めて身近なものであり、必要不可欠なパートナーであるということを実感しました。これからも、定期的に自然と触れ合っていきたいと思いました。ありがとうございます。（理工学部）
・はじめは修業を体験したいという想いをきっかけに、セミナー参加を決意しました。生命について考えるというテーマから、宗教的なにおいを感じて根も葉もない噂がとびかっている中でも参加でき、とても有意義でした。来年以降も学生のために是非、庄内セミナーを続けていただきたいです。（経済学部）
・得るものが多い、とても充実したセミナーでした。様々な学年、学部の人と共同生活をして、難しい「生きること」について考える機会はとても価値のあることだったと思います。思考してすぐ人に説明したり、議論したりする事に慣れていなかったので、自分の中で多くの改善点も発見できましたし、頭の良い参加者の話を聞いたり質問したりする姿から、多くのモチベーションを得ることもできました。（文学部）
・「生命について考える」というテーマに相応しい、大変実りのあるセミナーでした。諸講演、フィールドワーク、交流会、全てが楽しく、多くを学び、考える機会となりました。（法学部）
・慶應に入って良かったベスト５に入る位の素晴らしい体験をさせて頂きました。この経験を、東京での生活や自分の人生に生かせるよう、今後も精進します。様々にお力添え下さった方々には、心から感謝申し上げます。（文学部）
・とても安い参加費で貴重な体験をさせていただけたと思います。このようなセミナーがなければ庄内に来ることは一生なかったと思っています。これからの生命についてもっと考える（科学技術系）機会があれば面白いと思います。（経済学部）
・参加者の皆さんに刺激を受け、自然豊かな庄内の地で「生」について考える機会を頂き、とても勉強になりました。自分の死生観を確立させる一助とさせて頂きます。（経済学部）
・修業体験など、有意義な時間を過ごせ、生命についても一定程度向き合えた。しかし、生命について、こうあるべきだという思想的制限が少しあった気もする。（KBS）
・セミナーでは貴重な体験を数多くすることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。（文学部）
・庄内の文化・宗教を学べてとても良かったです。修験をもっと本格的にやってみたいと思いました。日本の古い生命観（修験）、最新の生命観（先端生命科学研究所）を同時に学べたことは大きな魅力でした。（文学部）
・数年前から存在を知りつつも参加しようとまでは思わなかった本セミナーですが、今回参加させて頂き、想像以上に有意義だったという思いがあります。自分と異なる考え方をする（生命について）人との出会い、現地の方との会話、大自然、美味しい料理、修験など、その全てが貴重な糧になったと思います。（法学部）
・生命という一つのキーワードをこれほど深く考えられる機会はとても貴重なものでした。セッションや修験体験を通して多くを考えることが出来ましたし、全く知らなかった人々と出会え、とても楽しく有意義な時間でした。（商学部）
・スクール形式の対話と議論ではなく、グループワークなどを取り入れた、小グループでの時間がもっとあったほうが、お互いにお互いの意見を共有できたと思います。３泊４日のプログラムが多少幅広すぎるかなと感じました。井奥さんの話では”生命”というテーマに即していましたが、酒井さん東山さんのプログラムは”生命”というテーマから離れすぎてしまったのではと思います。（法学部）
・全体を通して友人が増え、規則正しい生活と美味しい郷土料理を満喫し、心も体もリセットされた。修験道の体験では滝打ちが良かった。”気”の力を感じることができた。先生方とお話する機会も多く、住職殿の語りにも大きな学びがあった。新たな思想を知ることで教養を得た実感がある。（文学部）
・今回庄内セミナーに参加し、多くの先生方の意見を聞くことができました。全く知らない分野もあれば、よく知っているものもあり、どちらもさらに深い見識を広げることができたことについては大変嬉しく思います。このような機会はそう多くはないので、良い経験となりました。しかし、どの分野も時間の制約がある関係で、自分が納得いくまで知りつくしたとは思えませんでした。先生方も聞き手レベルに合わせて話しているようで、これは仕方のないことですが、せっかく

その道の先頭にいるような方々でしたから、その人にしか話すことの出来ないレベルの話を聞いてみたかったです。（理工学部）

・「生命」について真剣に考えることができる機会を提供してくださり、本当に有難うございました。普段深く考えられない、考えるのを避けがちであるテーマについて、他の参加者と共に考察することによって、自分の「生命」や「人生」に対する問題意識を深めることが出来たと思います。私はほぼ毎日部活動に励んでおり、こうして自然豊かで食も美味しい土地にてのびのびと自分と向き合うことができないため、実践できたことを嬉しく感じます。その上、日本人としてあまり日本文化に触れる機会が少ない中で、山伏修業を体験したり、庄内の人々の声を聞けたりしたことは、貴重な体験となりました。外国の方にも語れる事が増えました。（法学部）

3. 広報資料（庄内セミナーおよび庄内フェア）

4. 掲載新聞記事

2014年8月30日	荘内日報	1面

庄内をフィールドに「生きること」考える

―慶應大のセミナースタート

マインドマップ作りで活発に意見を交わす受講生たち＝28日、鶴岡タウンキャンパス

慶應義塾大の学生らが合宿形式で教養力を養う「庄内セミナー」が28日、鶴岡市馬場町の鶴岡タウンキャンパスで始まった。31日まで3泊4日の日程で、山伏修行や即身仏拝観、対話と議論を通して「生きること」について考える。

同大教養研究センター（所長・不破有理経済学部教授）が2008年度の鶴岡セミナーを前身として実施しており、今回が5回目。同大の学部・大学院の学生29人とOBの社会人一人の計30人が参加し、「生きることを考える―庄内に学ぶ生命」をテーマに多角的に学んでいる。

初日の28日は同タウンキャンパスで開会行事があり、不破教授があいさつで「庄内の豊かな自然風土の中で自分と対話し、自然と対話し、互いに考えをぶつけ合って生命について考えてほしい。答えは出なくてもいい。まっさらな状態で臨んで」とアドバイスした。

その後、最初の課題のマインドマップ作りに挑戦。中央に「生命」と書いた白い紙に各自が連想する言葉を次々に書きこみ、隣同士で説明しながら考えを深めるもので、「生きるということは歴史をつくること。次の世代に何かをつなぐために生きている」「突き詰めるとよく分からなくなる。単純化して考える方がいい」など活発に議論した。

法学部4年の野町美帆さん(22)は「社会人になる転換点で、これからどう生きるべきかを一度立ち止まって学んでみたくて参加した」、経済学部3年の福崎和久さん(21)は「修験体験に興味がある。対話を通して自分の中にある考えを深めたい」と話した。不破教授は「庄内は擬死再生の山伏修行、即身仏があり、死を思いながら生きることを考えるのに適した地域。セミナーでそれぞれの生命観が変わると思う」と庄内で生命について思索を深める意義を語った。

29日は大網の注連寺で即身仏拝観、松ケ岡開墾場見学、旧庄内藩校致道館での論語素読体験、30日はいでは文化記念館などでの山伏修行体験、31日は慶應大先端生命科学研究所ラボ棟見学を予定。夜には同大教授陣や地元の専門家らによる即身仏や羽黒修験、庄内の文化などに関する講話も行われる。

2014年8月31日	山形新聞	18面

滝に打たれて

慶応大生が山伏修行体験

命と向き合う

鶴岡 庄内

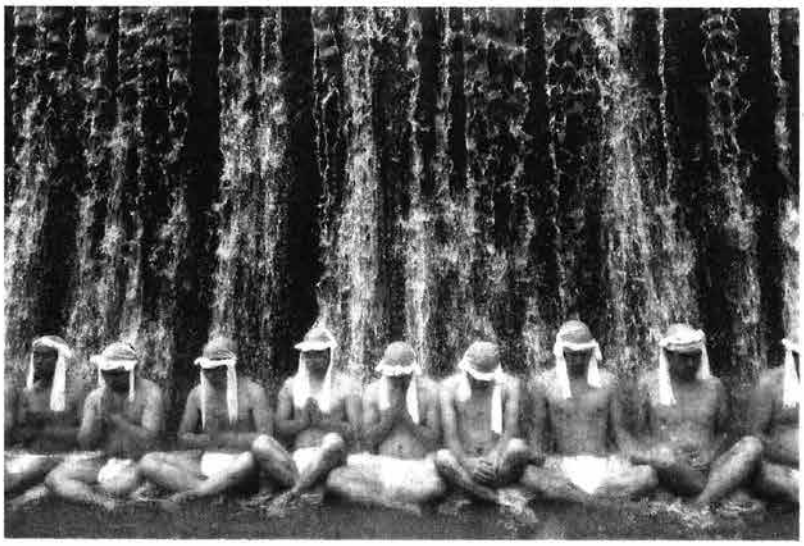
鶴岡市内で死生観を考える慶応大の「庄内セミナー」の学生たちが30日、羽黒の山伏修行を体験した。

セミナーは都心にはない自然エネルギーを体感しつつ、命や自分と向き合うことが目的。2008年から教養プログラムとして毎年開催している。ことしも各学部から応募した学生男女30人が参加した。28～31日の3泊4日で同大教授の講義やディスカッション、即身仏の拝観、同大先端生命科学研究所の見学などを行う。

30日は鶴岡市のいでは文化記念館で山伏について学習し、庄内町の立谷沢川では学生と教授が白装束姿になって滝行に挑戦。騒がしさを忘れ、数分間、無心となった。経済学部2年谷昭仁さん(20)は「最初は他のことが気になっていたが、肩に滝の水を受けるうちに何かが抜けたような不思議な感覚になった」と語っていた。

庄内セミナーで滝行に挑む慶応大の学生たち＝庄内町

2014年8月31日 | 荘内日報 | 1面



心を静めて滝打ち 擬死再生の行体験

――庄内セミナー参加の慶大生ら

慶應義塾大教養研究センターの「庄内セミナー」に参加している学生らが30日、鶴岡市のいでは文化記念館を拠点に山伏修行体験を行い、滝打ちなどを通じて擬死再生の行に触れた。

セミナーは「生きることを考える―庄内に学ぶ生命」をテーマに、8月28―31日の3泊4日の日程で行われ、

セミナーで滝打ちの行を行う慶應大の学生ら＝30日、庄内町立谷沢

同大の学部・大学院の学生、社会人の計30人が参加。同市大網の注連寺での即身仏拝観、旧藩校致道館での論語素読体験、対話と議論などで「生きること」への思索を深めている。

30日は、いでは文化記念館で山伏修行体験塾副塾長の勝木好峻さんから、山伏の返事の「うけたもう（分かりました）」を学んだ後、白装束に宝冠など山伏姿になり庄内町立谷沢に移動。玉川での滝打ちの行では、落ちてくる水の冷たさに声を上げ、体を震わせていたが、次第に心を静めて、じっと手を合わせ10分間ほど滝に打たれた。

法学部4年の池邉由望さんは「最初は寒いとしか考えられなかったけど、無になるということは何につながるのかということを考えながら打たれた」、法学部2年の工藤大貴さんは「滝の音しか聞こえず、無の状態になれた。でも生まれ変わるにはまだまだです」とそれぞれ感想を話した。

受講生たちは山駆け、トウガラシをいぶした煙の中に居続ける「南蛮いぶし」、再生になぞらえて火を飛び越える「出生（でなり）」なども体験した。

謝　辞　―あとがきに代えて―

教養研究センター前所長
不破有理（経済学部教授）

第５回庄内セミナー開催にあたってはほんとうに多くの方々のご理解・ご協力を賜りました。とりわけ、鶴岡市のご理解とご協力には心よりお礼を申し上げます。

鶴岡での合宿セミナーでは、セッションの講師を務めていただいた皆様に心より御礼申し上げます。

初日の夕講では目を見開かれるご講演をしてくださった化学者・井奥洪二先生、二日目には庄内の香り豊かなお話をしてくださった庄内藩酒井家 18 代当主の酒井忠久先生と東山昭子先生（鶴岡総合研究所研究顧問）に御礼申し上げます。東山先生が差し入れて下さった「だだちゃ豆」のえも言われぬ滋味と芳香に酔い庄内に魅了されました。三日目は修験の後に日本山岳修験学会の会長でもいらっしゃる鈴木正崇先生（文学部教授）が仏教修験の貴重なお話してくださり思考を深める一日の締めくくりとなりました。山伏体験のご指導をいただいた「いでは文化会館」の皆様、突然のお願いにもかかわらず松ヶ岡開墾場の謂れを気さくにお話頂き、美味しい昼食をご用意くださった酒井忠順氏（酒井家ご長男・松岡物産株式会社社長)、仏教のお話を通して日本のしきたりを楽しく語ってくださった注連寺住職の佐藤弘明氏、素晴らしいお声で荘内論語の素読をご指導くださった富樫恒文氏（統括文化財保護指導員)、セミナーを通じてプログラムの多くに付き添ってくださった遠藤誠氏をはじとめとする鶴岡市役所の関係者の皆様、宿泊・食事・講演セッションの快適な環境作りにご尽力いただいた休暇村・羽黒のスタッフの皆様、いつもながら取材・記事掲載を通してセミナーを広く報じてくださった荘内日報社（二日にわたり一面の紙面を割いてくださり感謝）と修験の滝行の場にお運びくださった山形新聞社に感謝申し上げます。最終日には日曜日にもかかわらずご出勤くださり、いつも素敵な笑顔で迎えてくださる慶應義塾大学先端生命科学研究所の塩澤氏、学生の貴重な映像記録を記録してくださった慶應義塾デジタル・メディア・コンテンツの村上氏と松沢氏に感謝申し上げます。

さらに慶應義塾大学生協（日吉)、日吉メディアセンター・日吉図書館の関係者の皆様にもお礼を申し上げます。

大学は学生の活躍があって存在意義を発揮します。最後になりますが、今回のセミナーが無事に終了したのは参加した学生諸君が真摯に自分に向き合いさまざまな課題に取り組んでくれた結果です。参加者全員にエールを送りたいと思います。教養研究センターのスタッフの皆々さんにもあらためて御礼申し上げます。小菅隼人新所長のもと、新しい副所長のメンバーを迎え、庄内セミナーも新たな体感型の「学び」の場としてより発展することを念じ、今後とも、これまで以上のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げまして、皆さまへの謝辞にかえさせていただきます。ありがとうございました。

庄内セミナー協力団体・個人

【団体】（順不同）

鶴岡市
鶴岡市教育委員会
いでは文化記念館
注連寺
荘内日報
山形新聞
松岡物産株式会社
休暇村　羽黒
慶應義塾大学生活共同組合
慶應義塾大学出版会
慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス
慶應義塾大学日吉メディアセンター
デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター

【個人】（順不同、敬称略）

井奥洪二（慶應義塾大学経済学部教授）
鈴木正崇（慶應義塾大学文学部教授）
酒井忠久（財団法人致道博物館　館長）
東山昭子（鶴岡総合研究所研究顧問）
吉住弘幸（いでは文化記念館）
遠藤誠（鶴岡市企画部政策企画課）

慶應義塾大学教養研究センター
2014 年度「庄内セミナー」報告書

2014 年 11 月 25 日発行
編集・発行　慶應義塾大学教養研究センター
代表者　小菅隼人

〒 223-8521　横浜市港北区日吉 4-1-1
TEL　045-563-1111（代表）
Email　lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

©2014 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。